

革命の道



フランク・ブクマンとMRA

革命の道

ー
フ
ラ
ン
ク
・
ブ
ツ
ク
マ
ン
と
M
R
A
ー

本書は1975年ロンドンのグローブナー・ブックス出版の革命の道
(THE REVOLUTIONALY PATH) を翻訳したものである。

目次

序文	1
第一部 どのような変革が必要か	3
(一) 基本的に必要なもの	5
(二) 精神界の奇蹟	6
(三) 出発点	9
(四) どうやって始めるか	11
(五) 革命をいやすための革命	14
第二部 世界を再造しなければならぬ	19
(一) MRAの発足	21
(二) 次の段階は革命	25
(三) 岐路に立つ人類	32
(四) 混乱に対する神の挑戦	34
(五) 危機に対する答	38
(六) 利己心に対する戦い	42
(七) 世界を再造する人びと	48

	第三部	デモクラシーのイデオロギー	49
	(一)	イデオロギーの戦い	52
	(二)	世界再建の唯一の希望	61
	(三)	どちらを選ぶか	67
	(四)	改変の全容 <small>オエンジ</small>	74
	(五)	革命の道	78
	(六)	電撃的な衝撃が必要です	84
	第四部	すべての処のすべての人のために	87
	(一)	パン・平和・希望	89
	(二)	混乱に应える新しい政治力	90
	(三)	精神界の電子学	95
	(四)	間違ったやり方と正しいやり方	100
	(五)	勇気ある選択	107
		フランク・ブックマンについて	115

序 文

フランク・ブックマンの提唱するM R Aは、彼が三十代の初期のころ、彼自身の人生に根本的な変革を体験したことから始まり、やがてそれは世界的なものとして拡がったのである。

ここに集録した演説は一九二〇年代の後半にオックスフォードグループとして知られた時から、一九三八年のM R Aの誕生、さらに一九六一年、彼が死に到るまでのM R Aが世界的に発展した時代の三十年間に渡っている。これらは多くの地域社会や国々に計り知れない影響を与えたものであり、内容は彼自身を含めた人びとの体験に基くものである。同時にまたフランク・ブックマン自身が常に摸索しつつあった思想の表明である。

彼は古くからの真理に新しい衣を着せ、複雑な概念を誰にでも理解し得るよう単純なものにかみ砕く並なみならぬ才能を持っていた。「あんな高い所に飼料を置いたってロバの口には届きはしない」と彼はよく言ったものだが、彼のそうした素朴さとユーモアは彼の偉大な精神の

発露であり、そのひと言の中に生涯を左右するような哲学があり、混沌とした問題を解く鍵が秘められていたのである。

具体的な現実をふまえ、しかも遠大な見透しを持った彼の考え方は多くの人に信仰の新しい概念を与えた。彼はまた多くの人に個人的体験に終る信仰にとどまらず社会に影響を与える信仰を見い出させた。時によって彼の提唱は受け入れ難いために反対者も多かった。彼は現代人が直面している問題に、もし彼らが解答を見つけないと望むなら新しい生き方を始めなければならぬと信仰のある人びとにもない人びとにも挑戦したのである。

一九六一年のマキノ大会の席上「日本はアジアの灯台となるだろう」と語ったフランク・ブツクマン博士の確信と挑戦に私たちは応えなくてはならない。生誕百年に当って、ここに本書を刊行できたことは私たち日本人にとって大きな喜びとともに深い意義を感じないではない。

この刊行に当って並なみならぬご協力をいただいた平沢恵子、岡本典子、春日屋蓉子、勝俣昇氏らに心から感謝を表明したい。

一九七八年十月

国際MRA日本協会編集部

第一部 どのような変革が必要か

第一次世界大戦の前後を通して、フランク・ブックマンは広くアジアを旅して、インドではマハトマ・ガンジーに接し、中国では孫文とも会った。彼は戦後の世界の各地で起こりつつある革命運動を目の当りに見て、楽観主義と理想主義では解答は得られないことを実感した。多くの人たちが待ち望んでいる新しい社会秩序を創り出すには彼が体験した革命による以外にはないことを知って、それを何とかしてその人びとに伝えようとした。その革命とは、戦争、飢餓、貧困、独裁に答えるばかりでなく人間性の現実を変えるものでなければならぬと感じた。それが鍵なのだ。人を変え、彼らに新しい目的と動機を与えること、あらゆる分裂を越えて人びとが融合できる世界的計画にすべての人を動員することだった。

彼はこの目的を達成するために世界を旅したが、既に一九二一年に次のように表明している。『個人的生活の変化を基盤にして社会的、人種的、国家的、世界的変革をもたらす計画』と。

こうして単なる理論ではなく現実の人びとを通して、真理を訴えようとした。このような思想が効果的であるには、それは生活に根ざしたものでなければならず、具体的に二本の足で歩き出さなければならなかった。しかしそのような人間性を改変させたり、社会の根本的な変革をもたらし得る源泉はただひとつしかなかった。

『オックスフォード・グループはキリスト教の革命であつて、それは生活された（生きた）キリスト教を意味するのだ。その目的は、新しい社会秩序である……。新しい光はすべての人に届くことができ、あらゆる心情のあらゆる階層の人びとを根本的なキリスト教の原則に引き戻し、人間として神への基本的忠誠を強調するものである。人間性の変化を体験した人たちを土台にして永続する和解は確保される。人間性の変化なくしていかなる文明も存続できないであろう』。

(一) 基本的に必要なもの

人智には限りがあります。

幻滅と、困惑と、無秩序にうろたえている現在の世界に、答を与えることが必要です。

今日の国際問題の基本には、利己心と怖れという個人的な問題があります。

これを解決するためには人が変わらなければなりません。世界の平和は人の心の平和からのみ生まれるでしょう。

地域的な対立、経済恐慌、人種的紛争、国際間の争いに対する解答は、神の自由な精神を力強く体験することです。

最も必要なことは神の支配です。

(二) 精神界の奇蹟

今日、全スカンジナビアの人びとは、スウェーデンとデンマークの海が合流するこのクロンボグ城で行なわれる聖霊降臨の大集会からの放送に耳を傾けています。

科学の奇蹟によって幾百万の人びとが、同じことを同時に考えたり、感じたりできるようになりました。時間と空間の障害がなくなってしまったからです。ラジオによって人間の声が世界の隅ずみにまで伝わることはもうあたりまえのことになっています。活ける神の声が、すべての家庭、すべての国会で活動的な、創造的な力になっていけないわけはないでしょう。

最初の聖霊降臨節に神はごく平凡な何人かの人びとに呼びかけました。この人びとが歴史の方向を変えたのです。今日人びとと世界を悩ましている多くの問題を、解決する計画を神はもっておられるのではないのでしょうか。

聖霊こそは、現代の世界で最も賢明な情報を与えてくれる根源です。神はすべての問題に解

決を与えてくれます。人間が神に自分をゆだねさえすれば、どこでも神は人びとに生き方を教えてくれます。

世界は奇蹟を必要としています。科学の奇蹟は現代の驚異です。しかし、それは平和と幸福とを国ぐにもたらしはしませんでした。聖霊の奇蹟こそは、わたしたちが必要としているものです。

神の導きが、普通人にとって、あたりまえの体験とならなければなりません。受信機さえ整備すれば、誰でも神の声を聴く事ができるのです。神の心から人の心に確実な、正確な、適当な情報が与えられます。これが正常な祈りなのです。

人間の性質を変え、人と国をつくり変える、精神的な迫力が必要です。あらゆるところで、あらゆる人びとに受け入れられる精神的な権威が必要です。それによってのみ、国内的にも国際的にも新しい秩序が生まれるのです。

この奇蹟が世界に起こるためには、どの国かが始めなければならぬでしょう。どの国かが神の意志に従うことをその使命とし、神に導かれた人びとを、国内的にも、国外的にも、国の代表者としなければなりません。怖れから解放され、野心にとらわれず、神の聖霊の導きに従う新しい指導者を創る国がなければなりません。

そのような国は国内が平和であるばかりか、国際的にも平和をもたらすことができるでしょう。この国がそのような国になるでしょうか。

(一九三五年年デンマークにてハムレットで有名な古城で一万人を集めたスカンジナビア大会からのメッセージ)

(三) 出发点

すべての人は相手さえ変わればと思つています。すべての国は相手の国に変わってもらいたいと思つています。しかし、みんな相手が始めるのを待っています。

オックスフォード・グループは、現代の世界に対して本当の解答を得たいと望むなら、一番よい出发点は自分だと確信しています。これこそが最初で、しかも基本であります。みんなが道義的、精神的な目ざめの必要を認めています。利己主義と怖れとは、あらゆる人びとと、国ぐに満ち満ちています。一人が本当に変われば、百万人が変わるのです。そして国が変わるのです。

秘訣は神の支配です。正気を失っているこの世界で、神に支配されている人だけが正気な人です。神に支配された個人が集まればはじめて神に支配された国民ができます。

真の愛国者は、自分の国を神の支配にゆだねるために生涯を捧げる人です。神に支配された

国の精神力こそ、世界で最も偉大な力であることを実証するでしょう。

世界の平和は、神の支配を受け入れた国々によってはじめて実現するのです。誰でも神に聴くことが出来ます。あなたはその一人でしょうか。あなたの国がその国になるでしょうか。

(デンマーク、一九三六年降誕節)

(四) どうやって始めるか

いたるところの指導者たちが世界は道義的、精神的な目ざめを必要としているといっています。大学でも、実業界でも、世界各国の大使館でもそういっています。多くの人がそれをいっています。中には非常に印象的な表現を使う人もいますが、いずれも単なる言葉にすぎません。問題はどうかしたらよいかです。口でいうことと、それを実現することとはちがいます。精神的な目ざめが必要だと感じている大方の人びとは、わたくしが二十年前に直面した困難——どうしたらよいか——に直面しているようです。

どうかしたらよいかわからない時、神に聴きさえすれば、道が示されるといふことをわたくしは知りました。人が聴く時、神は語ります。人が従う時、神は働きます。秘訣は神の支配にあります。私たちが神に命令するのではなく、神の命令に従うのです。そうすれば神は示します。

世界が最も必要としていることは神に聴く道を学ぶことです。わたくしはある將軍から人間の絵のかいてある葉書をもらったことがあります。その絵の下に、「神は人間に二つの耳と一つの口を与えて下さった。なぜ話す二倍聞かないのか」と書いてありました。これは、誰にでも毎日できることです。毎日、神に聴き、その計画を神から受けることです。

それにはルールがあります。第一のルールは心に示されるすべてのことを正直に聴くことです。そしてそれを書きとることが賢明なことです。第二のルールは、心に浮かぶ考えの中で、どれが神からのものであるかをためすことです。

ためす一つの方法として聖書があります。聖書には幾世紀にもわたって、神の導きに従って神と共に生きる実験をした人びとの経験が記されています。それを最も徹底的に実行したイエス・キリストの生活の中に私たちは最高の精神的、道義的基準すなわち完全な正直、純潔、無私、愛を見ることが出来ます。

もう一つの方法は「同じように神に聴く生活をしている他の人びとの考えを聴く」ことです。このことは仲間の不文律です。これはまた自分がどれだけ神に従おうとしているかをためすよい方法です。一人だけで働く人は、決して神の支配に徹することは出来ません。

神に聴く意志をもった一団の人びとに神ははつきりと語ります。神に支配された人びとを通

して神はいつの日か世界を支配せねばなりません。

(一九三六年七月、バーミンガムにて二万五千人を集めた英国工業博覧会において)

(五) 革命を癒すための革命

わたくしは、革命が起こっているという報道が刻々に入ってきているヨーロッパから話しています。情熱には情熱を、革命には革命をもって当らねばなりません。革命に対するオックスフォード・グループの答は、より以上に革命的であれということです。すなわち人間の性質の革命を行なうのです。それが唯一の希望です。

いったいオックスフォード・グループとは何でしょうか。ある新聞記者はこんなふうに書きました。

「制度でもなく、

ただの見解でもない

君自身の中にはじまる革命だ。」

今日、世界には、伝統を失い、品格を失い、国としての誇りをも失って、迷っている国が沢

山あります。私たちの多くは盲目で、事態があまりにも急速に変化していくのに気がつかないでいます。

何が本当の問題でしょうか。私たちは今日、精神的に乾ききっているのです。恐怖と貪欲とは、砂嵐のように諸国をおおって、大衆を盲目にし、窒息させています。それは人と人、階級と階級、そして国と国とを争わせています。

国の問題にしても、世界の問題にしても、根本の問題であるところの人間の性質がそのままになっていては、何の変化も起こるはずがありません。人間の性質を国家的レベルで徹底的に、容赦なく処理するまでは、国々には依然として暴力と破壊への歴史的道程をくりかえさなければならぬでしょう。

三千マイルの大海がその間に横たわっていようとともこの根本問題に変わりはありません。解決は私たちの責任です。ヨーロッパとアメリカでは症状はちがっても、病気は同じです。

その病気はおそれと不正直と、恨みと、利己主義ではないでしょうか。私たちは自由を口にしますが、実際は利己心の奴隷になっているのです。

今日社会の崩壊を防ぐには、神の支配を受け入れるしかありません。崩壊は私たち全体の利己主義の結果に他ならないのです。崩壊か神の支配か、あなたもわたくしも利己的であれば、

病氣の一部です。それと同様に、あなたとわたくしが、神に支配されれば、癒しの一部となれるのです。

オックスフォード・グループは神の支配を受け入れる革命であり、神が本当にあなたがたと、あなたがたの国とを導くことです。人は誰でも何かに導かれています。あなたは何によって導かれていますか。欲望ですか、財産ですか、恐れですか、奥さんですか、御主人ですか、それとも世間の評判ですか。自分の利己的な計画に従うことは、国に害を与えることになります。

人間は、神が創造したのですが、自分勝手に世界を運営しようとして来ました。そのことは、やめなければなりません。ウイル・ロージャースがよくいったことを覚えていますか。「神は人間を、天使よりいくらか下等なものに作った。ところが、人間は自らもつと下等になるうとしてきた」と彼はいいました。しかし、今や神に優先権を与える新しい時代が始まろうとしています。押し寄せて来る物質主義の勢力を、押し返すための全世界にわたるキリスト教的な戦線を構えなければなりません。教会が焼かれるニュースを耳にします。教会の焼かれることに対する唯一の答は、火のごとく燃える教会です。

能率第一主義では不充分です。善意と善行だけでは、問題の核心をつきません。理想主義は不成功に終わりました。永続性のある社会的、経済的復興は、道義的、精神的復興を基盤とする

以外にはあり得ないのです。

新しい光が世界にもたらさなければなりません。わたくしは電燈を發明した人を知っていました。誰でも電源にスイッチを入れさえすれば電燈をつけることができます。神との接続をもつことも、それと同じく實際的です。接続さえ確かならば、神は私たちに光を与えます。

オックスフォード・グループは、そのことは個人によつてなされるべきではなく、神の導きの下に、ともに働くことを学んだ人びとのグループを通してなされるべきだと信じているのです。

オックスフォード・グループは、神と接触したとき、平凡な人にも非凡なことができると思ひます。

神は人の心に考えを与えることができます。あなたは、その考えを聴こうとしたことがありますか。紙と鉛筆をもつて、神から与えられる考えを書きとめようとしたことがありますか。何でもないありふれた考えが浮かぶように思うかもしれません、正直に考えてごらん下さい。今まで気がつかなかつた自分の姿を見出すこともあるでしょう。絶対の正直、絶対の純潔、絶対の無私、絶対の愛、それはキリストの標準ですが、あなたの標準となつていますか。過去の間違いを正さなければならぬこともありましょう。わたくしは、そうしなければなりません。まず六人の人に手紙を書き、そしてお互いにあつたわだかまりは、わたくしのあやま

ちによるもので、彼らのあやまちでないことを認めました。

そのことがあつてから、わたくしは本当に人を助けることができるようになりました。世界を正しくしようと望むならば、まず自分が正しくならなければならないことを忘れてはいけません。

頭がいいだけでは足りません。神への服従が大切です。

神は古代の予言者には語りました。あなたにも語るでしょう。神は聴く人に語り、従う人を通して働くのです。

明日の朝、早目に起きて、神に聴こうと試みてみませんか。家族みんなで聴くようにしたらどうでしょう。毎日聴くこともできます。そして聴いたことに従う人たちが、力を合わせれば、世界を変える一大革命―キリストの十字架による―をもたらすことも可能でしょう。

(一九三六年八月　ロンドンからア
メリカへの放送)

第二部 世界を再造しなければならぬ

一九三八年になると、戦雲が世界中をおおっていくように思われた。その春、ヒトラーはオーストリアに侵入し、軍事的な野心はとどまるところがなかった。ブクマン博士はこの状態をみて、人類の道義的、精神的な力を動員する以外に道はないと思った。世界中の善意の人びとが結集できるような焦点、哲学というか、計画というか、が必要であった。たとえ戦争が避けられないとしても、戦後の和解と建設のためにそなえる必要があったのだ。

こういつた世界的な背景の中で、一九三八年、ブクマン博士はM R A（道義による再武装）を提唱した。その考えは、人びとに広く受け入れられ、世界にひろがっていった。ナチズムのドイツでは、「世界のデモクラシーの目的をキリスト教的衣でおおっている、ナチズムに対する妥協のない戦い」と受け取られた。M R Aはドイツの占領下にある多くの国々にとつては、レジスタンス運動の精神的ささえとなった。そして連合国の人びとには力と勇気を与えたばかり

りでなく、新しい世界をつくるための希望をも与えた。

平和であろうが、戦時中であろうが、ブックマン博士の目標は、はっきりしていた。神によって支配される世界をつくることであつた。自分のために生きるのではなくて、世界のため、他の人のために生きる決意をした人びとを基盤にしてつくられる新しい社会を目的としていた。

(一) M R A の発足

世界の現状は人びとに不安と憂いを与えずにはいません。国と国、労働者と資本家、階級と階級との間に、敵対心が盛り上がっています。憎しみと恐れは日一日と増大しています。争いと不満は、家庭をむしばんでいます。

個人と国のこうした状態を早く癒す希望はあるでしょうか。

それは、私たちが子供の頃、母の膝で教わっていたながら、忘れてしまったり、なおざりにしている平凡な真理、正直、純潔、無私、愛にもどることにあるのではないのでしょうか。

現在の危機は根本的に道義的なものです。国々には道義的に再武装しなければなりません。経済が回復する前に、まず道義を正す必要があります。

絶対正直と絶対無私の精神が満潮みなしほのように国々にを覆うありさまを想像して見ましょう。ど

んな結果がでるでしょう。納税にしても、負債にしても、絶対無私精神が世界中の国をおおえば、戦争は無くなるでしょう。

道義が浸透すれば、危機はなくなり、かわりに信頼と融和が社会のあらゆるところで生まれるでしょう。どうやって国ぐいの道義の浸透を早める事ができるのでしょうか。人と人、派閥と派閥に橋をかけることのためには、人間性を変える強い力が必要です。相手のあやまちを指摘するのをやめて、自分のあやまちを認めるならば人間性が変わりはじめめるのです。

神のみが人間性を変える力を持っています。

人が聴けば神は語り、人が従えば神は働く。人が変われば国は変わる、という忘れられた偉大な真理の中に秘訣があります。少数の人の中に積極的に神の力が働くとき、国の問題は解決されるでしょう。指導者が変われば、国の考え方も変わる。そうなれば世界は平和になります。

「われわれは世界を再造する者」——これは誰でもが考え、希望するところではないでしょうか。たいがいの人、他の人が正直になり、他の国が自分の国に対して平和であってほしいと思つています。私たちはみんな何かを得ることばかりを望みますが、指導者が変わったら、私たちは与えることを欲するようになるでしょう。この新しい考え方の中に、経済の回復を麻痺させている多くの問題への解答を見出すことができるでしょう。

みなが十分に思いやりをもち、十分に分け合うならば、みなが十分にうるおうのではないでしょう。世界にはすべての人の必要を満たすだけのものは十分にありません。しかし、すべての人の貪欲を満たすだけのものではありません。

失業者もMRAに参加できるのです。国ぐんに安定と安全と正気をとりもどすこの仕事に一人残らず引きつけられ、動員された状態を考えてごらん下さい。

すべての人、男も女も子供も動員され、すべての家庭はとりでとらねばなりません。その目的は単に生活の必需品を十分に持ったためばかりでなく、MRAを通じて自国の平和と世界の平和をもたらし役割をもつことでもあります。

神の与える遠大な計画は一人びとりにインスピレーションと自由とを与え、いかなる政治的動きにも対処できるのです。

就業している人も失業している人もすべての人がMRAに参加すること、人と家庭と職場とを造り変える大事業に参加することです。これこそ国家への最大のサービスです。

スウェーデンのある製鉄工が私にいました。「精神革命こそ、人間と産業とがほんとうに必要なものですよ。」

また、ある労働組合指導者はいいました。「私は労働運動が勝利を収めるのを見てきました。」

しかし、勝利のさなかにうつろなものを感じていました。オックスフォード・グループは私の生活に新しい内容を与えてくれました。私はオックスフォード・グループのメッセージの中に世界の労働運動と産業の将来をひらく唯一の鍵を見出すのです。」

人の心のあり方が変わってこそ産業界にも新しい精神が生まれます。

産業は新しい秩序の先駆者となり、利己主義の代わりに国に奉仕する精神をもち、神の導きを基礎として計画を打ちたてることができます。労働、経営、資本の三者が神の導きの下に協力するとき、産業は国民生活の中で本来の使命を果たすようになります。

新しい人、新しい家庭、新しい産業、新しい国、新しい世界。

私たちは、まだ神の心に秘められている偉大な創造力の源泉を汲みとっていません。神には計画があります。国民の道義的、精神的な力が結集されたとき、その計画を見つけることができます。

世界を再造し得る強力な道義的、精神的な力を私たちはつくり出すことができます。つくり出さなければなりません、必ずつくり出しましょう。

(一九三八年六月、イギリス労働運動
発祥の地ロンドンのイーストハム公会
堂で、博士六十才の誕生日に際して行
なわれた講演)

(二) 次の段階は革命

今日、私はここで統一された戦線をつくりたいのです。根本問題は、神に導かれているか、否かということです。

私が話を終えるまでに、何人かの人が、決心をされることを望みます。いろいろ異なった目的をもって来ている人もいます。自分が変わろうとしてきている人もいます。それは非常によいことだし、非常に必要なことです。他の人を変える方法を学びにきている人もいます。それも非常に必要なことです。

しかし、危険なことは、そこでとどまってしまふことです。わたくしは第三の目的に大いに関心をもっています。それはどうしたら崩れさろうとする文明を救うかということです。それがわたくしの関心事なのです。さらに、もう一つ、四番目のねがいをもっています。それは世界の何百万の人びとに到達したいということです。

このことは、みな自然にこの順序にしたがって起こるはずのものです。いったん自分が変わったならば、当然に他の人を変えたいと思うでしょう。そのつぎには文明を救いたいと思うでしょう。最後には、世界の何百万の人びとに呼びかけたいと思うでしょう。それが自然の順序です。

ところで「罪」というものがあります。皆さんが罪というものを認めるかどうか知りませんが、事実存在しているのです。罪の存在について大いに議論を戦わしたい人がいるかも知れませんが、どうかそういうことをして今日一日をむだに過ごさないで下さい。そんなことをすると、大切な要点からはずれてしまいます。私たちは議論をするために集まったのではないのです。建設的なプランをたてて、具体的に行動を開始するために集まったのです。みなさんのなかには、オックスフォード・グループから気持のよい、楽な救いを期待している人がいることを私は知っています。宗教復活集会というようなもの、いいかえれば安楽椅子的宗教です。そんなことを考える人もいるのです。しかし、そこで止まってしまったら、まことに遺憾です。もし、そこに止まってしまいう人に対して、わたくしが警告しなければ、わたくしはあなたの敵です。今日、そういう物の考え方をしている人は大衆を救うために十分に考え、本当に計画をたてているとはいえません。

ただのリバイバルを始めることには、わたくしは興味をもたないし、そんなことで十分だとも思いません。憂国の志に富んだ政治家であれば誰でも国には道義的、精神的な目ざめが必要だと必ずいいます。それは根本的であり、絶対に必要なことです。リバイバルは考え方の一つの段階にすぎません。そこで止まってしまつては程度の低い考え方といわざるを得ません。それよりも大きなものを求めなければ、すべて終りです。

次の段階は革命です。革命は居心地のよいものではありません。その言葉さえいやがるキリスト教徒は少なくありません。それを聞いただけでも怖がり鳥肌がたつ人もいます。そのような人たちが批判をやるのです。つまり、安楽椅子に腰かけた鳥肌キリスト教徒がいるのです。革命というものが必ずしも居心地のよいものではないことはわかっていきます。しかし、今日わたくしは、みなさんを心地よくさせるために来ているのではなく、みなさんに好かれようと思つて来ているのではありません。オックスフォード・グループがすべての国に与えようとしているものは精神的革命です。しかし、みなさんのなかにはそういうふうには考えない人もいます。世界のもっと利巧な人びとのなかには、破壊的な革命の線にそつて考え、それを推進している人もいます。もし、私たちがより大きな精神的革命という理想をもたない限り、そのような革命が起こり得るのです。問題は、キリスト教徒がヨーロッパを動かすようなキリスト教的

哲理を築くことができるか否かです。みなさんはそうした革命をなしとげるようなキリスト教徒ですか。それが新約聖書ではないでしょうか。それがクリスチャンということではないでしょうか。みなさんはそれを行なおうとしていますか。それはあなた方の計画ですか。政策ですか。あなた方が、この戦線に参加する気がなければ、それまでのことです。わたくしはあなた方と議論する気もなければ、あなた方を批判するつもりもありません。あなた方はただ好きな方法で、好きなことをすればいいのです。それがデモクラシーだとあなた方は考えているのでしょうか。

わたくしは、それを真のデモクラシーとは思いませんが、一般に考えられているデモクラシーとはそうしたものでしょう。デモクラシーの生命は内面的權威を認めるところにあると私は思っているのですが、民主主義国の中には言葉にも行動にもそれを認めない人びとが、ますますふえています。めいめいが自分勝手な計画をもっていることは大したものです。自由なので、誰でもが好きなようにやれるというわけです。ところが、オックスフォード・グループではそうではありません。そこには真のデモクラシーがあります。人は好き勝手にやるものではありません。神の導くままに行なうのです。神の計画を実行するのです。

わたくしは、ここで革命家にとって必要な資質についてすべていうつもりはありません。使徒行伝や福音書にはすべてを献身した人たちのことが書いてあります。また、すべてを献身し

なかつた人たちのことも書いてあります。革命に身を挺しながら、人によって自己保身のための安定を求めている人がいますが、あなた方はどうですか。そんな型の革命家になりたいですか。もしそうだったら、戦線のはるか後方に居心地のよい場所があるかもしれません。しかし、本当の革命家は最前線に立つてでしょう。

それから第三段階があります。文明復興ルネッサンスです。個人の生まれ変わり、国民の生まれ変わり、国の生まれ変わりで。個人や国は生まれ変わることができるとしようか。国が生まれ変わるごととか、何百万人の人びとにふれるとかいうことを好まない人がいます。そういう人たちはそのような計画を単なる宣伝だといって嘲けます。たくさんのキリスト教徒や利巧な人たちが、このような他愛もないことでくじけてしまうことはまことに驚き入った次第です。ことを行ないたいと思うとき、宣伝をやつては、いけないのでしょうか。宣伝はすべて破壊のためのものでなければいけないのですか。

批判が気持のいいものでないことを、わたくしはよく知っています。しかし、あなた方が本格的な革命家ならば、人が何といおうが見透しを誤ることはないはずで。石がどこから飛んで来ようが、まっすぐ進むはずで。批判のつぶては人の心を引きしめ、その日一日を張りきつて下させるものです。

わたくしはあなた方がいろいろと準備して下さったことや、多くの困難をのりこえたことに
対して、深く神に感謝しています。しかし、まだまだ、私たちの仲間内には罪があります。そ
の罪とは「程度の低い考え方」であるかもしれません。

旧約聖書の詩篇第五十一篇を読んでごらん下さい。それはすばらしい人間の体験が語られて
います。それから新約聖書のなかに書いてあるキリストの十字架について読んで下さい。キリ
ストの十字架の意味がわかるまでは決して、決して、その体験をすることはしないでし
ょう。あなた方のなかには日曜日ごとに、その話を聞いている人がいるでしょう。しかし、それは体験
ではありません。もし本当に体験をしたならば、決してたじろぐことはないでしょう。

わたくしはあなた方に一つのことを約束します。わたくしは後退しません。誰が後退し
ようとも、またその犠牲が何であろうとも、わたくしは後退しません。わたくしがいるからと
いう理由だけで、あなた方に一緒に来てもらいたくありません。そんなことではないのです。
そんなことだったら貧弱な革命です。貧弱な同志です。キリストの十字架の光景をちよつと思
い起こそうではありませんか。もしこの大十字軍に参加するならば、十字架の道が与えられる
でしょう。わたくしは物質的な成功の希望で、あなた方を釣ろうとはしません。またあなた方
が、英雄になるだろうといって誘いもしません。この国々には、人間の生きるべき姿の模範を

示すことができるかとわたくしは信じていますが、それであなた方を誘おうとも思いません。十字架を自分自身が体験することです。わたくしではなく、キリストです。わたくしが先頭に立っているのではない。キリストが率いているのです。

今日の午後にはいくつかの集会有るでしょう。法律家の集會も、教育家のも、みな大切な集會です。しかし、それよりもっと大切なのが一つあります。それは神とあなた自身とが会いまみえることです。他の集會への出席は全部取り消してもこの会見には出席すべきです。今日の午後、あなた方にとって最大のことは、一人で静かに、革命家の同志の一人として戦線に立つかどうか、立つとしたら受けもつ部署を決めることです。すぐ決定なさいとはいいません。あなた方が決定しなければならぬことはあなたと神との間のことです。一人でおやりなさい。紙に書きとめたかったら、そうするがいいでしょう。財産の譲渡の場合と同じで、それは証文です。革命家の同志の一人として全面的な、そして完全な指導をうけるために、あなたの一生を神の手にゆだねる証文です。その時、あなたは初めて自由になるでしょう。自由になって真のデモクラシーを知るようになるでしょう。これがわたくしの挑戦です。

(一九三八年八月、スウェーデンのヴィビーでスカンジナビアの人びとに向かつて、ブックマン博士はMRAに心はひかれていたが、国のレベルで解答を与えるという意味のわかっていない人の理解を深めようとして行なった講演)

(二) 岐路に立つ人類

今朝、わたくしは、アルプスの連峰が暁の光に照り輝き始めたとき、ユングフラウ山上に見える朝日の光を見ました。それはヨーロッパと世界のために、新しい日を告げる神の光明となるでありますか。

世界は今、この歴史的選択の前に立っているのです。目前の決定は歴史の手綱をとりつつある少数の人びとの肩にかかっています。私たちが一人びとりも、「何が起ころうとも、自分も国も完全に活ける神によって支配されることと、世界のための神の計画を受け入れること」を厳粛に決意しなければなりません。

オックスフォード・グループは、国の問題を人間を通して答えていく有機体を築き上げています。その大事業を果たすために、すべての男女が神の支配下に入るように挑戦しています。

人類は岐路に立っています。私たちは自分自身のために、また、各自の国のために、最終的

な決断をしなければなりません。制御することのできない暴力と暗黒への道、すなわち利己主義の道をえらびますか、それとも、人びとがともに生きる道、すなわち神の下で正義、理解、平和などの古来の美德が支配する健全な世界への道——十字架の道をえらびますか。

選択は各人にかかっています。誰もが神の導きをうけて人間を改造する人となることができますし、神に支配されるすべての人はM R Aのための勢力となるのです。

この信念はあなたの中の心の中に情熱となっていますか。そうであれば、それは火のようにあなたの国に拡がるでしょう。

活ける神の主権を受諾し、その下に動員されて自国のために戦い、そうして平和と新しい世界に対する人類の切実な渴望に答える人びとはどこにいるでしょうか。

(一九三八年九月、スイスのインタールレーンで開かれたM R Aの第一回の世界大会で危機に直面している人類の選ぶべき道を説いた講演)

(四) 混乱に対する神の挑戦

現在、私たちは世界始まって以来ともいうべき大きな戦いを行なっているのです。この戦いは国と国との戦いではなく、混乱に対する神の戦いです。

真の宗教的体験は人を変え、家庭を変え、産業を変え、国を変える力を持っています。今までに体験したことのない偉大な宗教的体験が現実とならなければなりません。それは、私たちの偏見や、個人的意見を超越したものでなければならぬし、それこそあらゆる問題に対する待望の解答だと誰もが直感できるようなものでなければなりません。

私たちの今までの宗教的体験という概念を考え直さなくてはなりません。その多くは真実の力のない体験であることを認めなければならぬでしょう。ほんとうならば生命を与え、国をも形づくる体験であるべきものが、往々にしてなんらの効果もなく、粗野で味気のない、つまらない、生ぬるいものになっています。間違った道義づけのために正しい宗教的概念がゆがめ

られています。私たちの精神生活が貧困なために、宗教は政治や実業には無関係であると口達者にしゃべっています。

私たちの宗教経験というものが、あまりにも長い間低かったために、私たちの考え方や行動や計画が、人に支配されるのでなくすべて神に支配されるならば、アルプスの山々の高さにも似た高い宗教経験を持つことができるということすらわからないのです。予言者イザヤの言葉を借りていえば「汝神なるが故に国々には汝のもとに集まる」のような力強い宗教経験を通過の新しい創造的な力を今世界は必要としています。

今日、私たちは、歴史の流れを変えるような経験を創る代わりに、その流れに押し流されてしまっています。最近の危機に際して、多くの人は神に戻りました。人間の絶望は神にとつては好機であり得るのです。エデンバラのある地主の奥さんが私にいました。「困ったときに祈ることは皆がすることだけれど、そうした危機がおこらないように、普段正しく生きることが大切ですネ」と。

どうしたらこの新しい生活の質を見出すことができるでしょうか。世界を変えることのできる精神をどうしたら捉えることが出来るでしょうか。それは真実の宗教経験を通過してのみ可能なのです。人の心を変え、社会の状態を変え、国の真の安全を確保し、国際間の理解を増すこ

とが出来たのもこれです。これが真に効果的であるのは、源が神であり、人間の性質を實際に変えることができるからです。

今日、私たちはあまりに人間の声を聞きすぎます。あきあきするほどです。神の声を渴望せずにはいられません。そうです。神の声が国民の声となり、神の意志が国民の意志となることを渴望するのです。

そうした時に新しい精神が国々に満ちあふれ、すべての困難を打開し、見解の相違に橋を渡し、偏見に打ち勝ち、基本的忠誠心を確かめ、国家生活に融和をもたらずでしよう。国をあげて偉大なる基本精神を受け入れることができます。オックスフォードのある女店員がいました。「イギリスに必要なのは神の靈感で書かれ、すべての人が署名する大憲章です」。

決定的な今日、私たちの宗教的体験は再び世界を勝ち取る力強い働きをするようなものではないかもしれませんが。残された唯一の希望は巨大な規模における力強い改変チェンジです。この改変はキリストを通して人間の性質に起こる改変チェンジで始まります。

新しい人びと、新しい家庭、新しい産業、新しい国々に、新しい世界。

全部をキリストに捧げ、神に導かれた人によって、その人を通して、またその人のために、キリストが何ができるかを世界はみようと待望しているのです。あなたがその人になれるので

す。

全部をキリストに捧げ、神に導かれた国によって、その国を通して、またその国のためにキリストは何をなし得るかをみようとする世界は待望しています。あなたの国がその国になれるのです。

(一九三八年十一月、イギリスのBBCが放送した「宗教的体験の効力」と題するシリーズ番組の一つとして行なったブックマンの講演)

(五) 危機に対する答

危機に対する解答はあるのですから、それを知らせなければなりません。

危機は私たちの失敗の現われです。危機が破局に達する前に、私たちはその原因を直視する勇気があるでしょうか。私たち自身がその原因のすべてなのです。私たち自身および国の生き方が原因で、今日このようなハメに陥っているのです。

今日の状態に至った責任はすべての人とすべての国が負うべきです。

失敗の責任は一つの国だけにあるのではなく、すべての国が分かつべきものです。私たちみんなが悪いのです。何故なら、どの国にも恨み、分裂、破壊をかもし出す勢力が働いています。また、国も個人と同じように、お互いに指をさし合つてばかりいて、自分自身のあやまちには目をふさいでいます。利己的な人びとが第一線の塹壕を必要とさせているのです。私たちの国をも、他の国ぐにをも、無私の波で洗うことが、戦争に対する恒久の解答であります。

私たちはみんな平和を求めています。協定によって、連盟によって、同盟によって、制度を変えることによって、経済会議によって、軍縮会議によって、それを求めましたが得られませんでした。私たちは平和を求めましたが、まだ平和の代価を払っていないのです。私たち自身、私たちの国が正しくなかった点について、神に直面し、神の導きのままに、あやまちを正しくするという代価を払ったことがあります。

新しい精神は他国のあやまちを指摘する代わりに、私たちが自分自身のあやまちについて正直にあやまるときに生まれてきます。国も人も、つまり私たち全部が変わる必要があるという事実の中に和解の場があるのです。今日の危機に際して、指導者が変われば、国民を変えることができます。また、もし国民が変われば、指導者を変えることができます。

今日の危機は道義的なものですから、それに対処するにはMRAの精神、すなわち正直、正義および愛の精神をもってせねばなりません。MRAは敵も味方も、他国も自国もおしなべて、すべての人を変わらせる力をもっています。私たちはこのような一見矛盾とも見えるが、正しい説を受け入れる心の準備をしていなければなりません。

すべての人は自国に対して責任があるのです。国民がこぞって要求すれば、その国は正直にあやまって、過去のあやまちを改めるでしょう。

すべての人は直ちに果たさねばならぬ役割をもっています。それは、自分自身の、心の改変^シを受け入れることです。毎日、神の声に耳を傾ける決心をすることです。そして、憎しみ、恐れ、貪欲から自由な世界をつくり始めることができます。

恒久的な平和のために必要な犠牲は、戦争が要求する犠牲にくらべれば物の数ではありません。

利己的で、恐怖にみちた世界が活ける神の声に聴くことは、今でもまだおそくはありません。外交において忘れられた要素は、神には平和のための計画があるということ、神に服従する人びとをおしてその計画を実現する手段があるということです。

神に対する忠誠は、他のすべてに対する忠誠より高いのです。人類すべてが神に服従する時に、国々にはそれぞれ真の使命を見出すのです。それが本当の愛国心で、最高の勇気を要すると同時に、最大の力を与えられるのです。

私たちは今、国家大の考え方と行動とを必要とします。私たちは新しい世紀を目指さなければなりません。新しい型の人、新しい型の家庭、新しい型の産業、新しい型の政治を示さねばなりません。今こそ私たちは、正しい平和——永久につづく平和——の建設者を育成しなければなりません。

将来は神の声を聴き、それに従う人と国のものです。

(一九三九年八月、アメリカのボストンから
ヨーロッパとアジア向けの放送)

(六) 利己心に対する戦い

わたくしは今日、M R Aを将来の唯一の希望として、憂うつな情勢にもかかわらず、ますますそれに期待をかけている何百万という世界中のみなさんにお話します。特にわたくしの念頭にあるのは第一線の塹壕で冷厳な現実に向直している人びと、戦争が如何なるものであるかを体験している人びとです。

しかし今日、第一線の塹壕はどこにあるのでしょうか。現に多くの国では、非戦闘員でも防毒面をたずさえないものはなく、防空壕の掘られていない庭はありません。これは新しい戦争の様相であつて、この戦争では、すべての人に責任があり、すべての家庭は前線の塹壕なのです。

私たちの和解の術は、戦争技術の進歩と同じようには進歩しませんでした。今や、破壊の術は生きる術を追い越しはじめています。前大戦後に通貨が暴落したように、私たちの価値観も

転落しつつあります。わたくしの友人で、オックスフォードの哲学者のストーリーター博士は、「知的に發育した民族は道義的にも發育しなければ滅びてしまう」といいました。

今日、私たちは岐路に立っています。人間が支配しようとする文明は崩壊の危機に望んでいます。長い間つづいた危機から危機への循環は、終らねばなりません。

新しい哲理が必要です。個人間と国家間に建設的な関係をうちたてることのできる世界哲理が必要です。この高められた考え方と生き方から、新しい政治家と指導者が生まれてくるのです。

人びとが活ける神から導きを受けると、こうした世界哲理は地上に現われるでしょう。それは憎しみや、怖れや、貪欲から解放された生き方の中に見出されるでしょう。

憎しみや、怖れや、貪欲の代価を考えてごらん下さい。人類は長い年月の間、仮面をかぶって生活してきたために、今日、何百万という人びとは防毒面を持たなければならぬのです。何百万という人びとが、暗い都市の街路を手さぐりで歩かねばならないのは、諸国民が精神的な燈火管制の暗闇の中に生きて来たからです。何百万という人びとが、今日、空襲警報に耳を傾けねばならないのは、過去において、諸国民が神の聲に耳を傾けなかつたからです。

危機によって私たちの思想と行為の破産状態が明らかにされます。そうすると、私たちは血

眼になつて即席案と便法を探そうとします。しかし、それが時間とエネルギーを無駄にし、しかも最後は失敗に終るとき、私たちは神の支配に身をゆだねることになるでしょう。

人は今、人間の知恵が失敗に終つたことを認める段階に達しています。神に語ってもらいたいと願う心境は深まりつつあります。刻々に変化する、途方もない、誰もがいやがるような新聞の見出しを眺めて暮らす人間が、絶望からのがれるには、それ以外にないでしょう。事象を解釈したり、形づくったりするために人は何らかの適切な声を必要としています。一時しのぎの便法は“神の導き”にゆずらなければなりません。“神の導き”は必需品で統制されてはいないので。燈火管制下の闇夜に静かに待っている時間も、あるいはかくされた恵みといえましょう。

世界は解答を待っています。戦争は利己的な国々にの払う代価です。すべての人びとが手に入れることができ、すべての人びとによって適用され得る簡単な実行可能な解答をもたねばなりません。私たちは適切な平和をつくるばかりでなく、それを維持するように訓練された人たちを必要とします。多くの人は利己的ですから、平和を欲しながらも自分自身は個人的な争いを続けたり、享樂に耽つたりするので、あるアメリカの主婦は、こういう質問をしています。「アメリカの利己主義と貪欲とは誰のせいでしょうか。企業の責任でしょうか。労働者の責任で

しようか。それとも全米の何百万の家庭の責任でしようか」と。

新しい精神が生まれえない限り、私たちは自分たちの利己心の高い代価を払わなければならないでしょう。

最大の罪は、私たちが適当な人生哲学をもたないことです。生きることにについての私たちの考え方——安易を求める軟弱な、自己保存の気尽な考え方は間違っています。私たちは徹頭徹尾、新しい内容と考え方をもった生き方をしなければなりません。個人をも国をもこのように破壊するようになったのは、長い間世界の頭脳と思考とがサボタージユされ、浪費されていたからなのです。

私たちはこれまで自分勝手に考え、生きてきました。これからは神の欲するように考え、生きようと努めてみましょう。他人に生きてほしいと思うように、自分が生きるべきです。他の国に生きて欲しいと思うように、自分の国が生きるべきです。そうすれば私たちの国は新しい世界秩序の先頭に立つでしょう。

M R Aは偉大な革命勢力の中核です。私たちは利己主義に対し、史上最大の世界戦争を戦っているのです。全員銃をとれ！ 私たちは大衆を改変し得るような生活の質を生きる必要があります。過去数十年の間、そうした適切な行為がなかったために今日、私たちは戦争という高価

な犠牲を払わされているのです。破壊の勢力に打ち勝つためには、今、私たちが一層よく、一層賢明に建設することです。

今、必要なことは、何百万の人びとが新しい世界を計画するということです。単に数人の政治家が集まって会議を開くだけでなく、日常の生活と実践に支えられた世界の融合された勢力が、利己主義に対して永久的な戦いを挑むことで政治家を支持することが必要なのです。これが行なわれたとき、私たちは初めていま必要としている解答の入口に立つことができるのです。

M R Aの門戸は万人に向って開かれています。誰をも排除するものではありません。それは“生活の質”です。M R Aには入会ということも、脱会ということもありません。生き方です。普通の人も政治家も力を合わせて自国の重荷を背負えというのが私たちの呼びかけです。各自が当然しなければならぬ考え方も、計画も、生活も、政治家が代わってやるべきだということのために、責任はあまりにもしばしば少数の人びとにおおいかぶさって来ました。

私たちは世界を再造しなければなりません。それが私たちの仕事なのです。男も、女も、子供もこのために動員され、すべての家庭はこのための城砦とならねばなりません。

神の声を聴くという体験を始める無数の人たちの影響によって、新しい世界哲理は威力を発揮するでしょう。もちろん、はじめは初歩の体験にすぎないかも知れません。動員されたから

と、直ちに訓練された戦士になれるものではありません。しかし誰でも始めることができます。

今こそ、利己主義に対する世界戦争のために志願する好機です。私たちは不断の戦士とならなければなりません。

私たちは今、新しい世界秩序への閾しきいを跨またごうとする瞬間に立っているのです。

すべての責任があまりにも少数の人の肩にかかっています。それは、国民の一人一人が正しく考え、計画し、生活すべきなのを、すべて政治家にまかせてしまったからです。

(一九三九年十月、サンフランシスコからヨーロッパとアジアに向けての放送)

(七) 世界を再造する人びと

クリスマスに当って、幼な子キリストが新しい思想を私たちに与え、政治家も一般の人びとも求めている新しい世界をもたらさし給うように、私たちには四次元の考え方が必要です。それは神からの賜物で、暗黒に光を与え、迅速な解答をもたらすものです。

賢人たちは最初のクリスマスの夜、星に導かれて遠い土地から来ました。私たちのひとりびとりが光に導かれて人類が求めている贈り物、いかなる世俗的な贈り物にもまさるものをもたらすことができますように。

試練と苦難は予言者を鍛える溶鉱炉です。私たちが世界を再造していくものになるのだという共通の意識をもち、神が私たちに与えたもうた四次元の思考という賜物を勇氣を持って受け入れることができますように。すべての人びとと政治家が求めている新しい世界は、私心をなくした神に導かれた融合の中に見出されるのです。

第三部 デモクラシーのイデオロギー

戦争が進展するにつれて、戦いの焦点は単に軍事的なものではなく、イデオロギー的なものであることが明らかになってきた。戦争に勝つだけでは、この深い相克は断ち切れなかった。正義と調和の新しい世界を建設するためには勝敗を越え、イデオロギーの違いを越えて、すべての国々に必要な何か新しい遠大な目標が必要とされていた。フランク・ブックマンは自由を裏付けるイデオロギー、つまり物質主義よりも、より効果的に人間性の核心に触れて機能する自由の考え方を民主主義国は見い出さなければならぬと強く主張した。物質主義に基づいたイデオロギーの弱点は、人間性を結局は強制や強迫、粛正で片付けてしまう処にある。言い替えば、それは自己破壊の種を自ら抱えているということである。M R A は人間の意志と動機とを変える根本的革命的道の道を示唆している。

戦後、フランク・ブックマンは、この確信を再建の真ただ中であつたヨーロッパ大陸で実践

していた。そこで必要とされているひとつには、ナチズム崩壊後のドイツが民主主義国として立ち上がり、相争った国々にとの間に融和の基盤を見出すことであつた。これを達成させるにはあらゆる立場の者の姿勢がその根本において変わっていかなければならなかつた。

この時期に、ドイツのルール地方と同様、北フランス、北イタリア、その他の地域の共産党員たちは、M R Aこそ彼らが描いていた、目標とすべき遠大な革命であることに気がついていった。

「この危機の時代に、マルキストたちは、新しい考え方を見出しています。」と、一九五〇年、ルール地方のゲルセンキルヘンからの放送でフランク・ブックマンは語つた。「階級闘争に代わる新しい労使の関係が生まれています。労使は互いに建設的な関係を持つて生きようとし始めています。」

「皆が融和できる基盤として、すべての人が変わるといふことがあり得るだろうか」と彼は聴取者に問うた。「マルキストたちは変わることができ得るであろうか。彼らはより偉大な思想に道を開くことができるだろうか。いや、彼らにできないはずはない。彼らは常に新しい考え方をとり入れてきたし、又常に時代の先端を行く人たちであつた。自分たちの信念の為に牢獄につながれることも厭わず、信念の為に死さえ拒ばまなかつた。そうした彼らがより優れ

た考え方を生きようとする人びとになれないはずがない。」

同じように日本に対してもフランク・ブクマンは、民主的発展と和解をもたらす新しい国の態度が生まれてくることを願って力を尽した。日本と韓国、日本とフィリピンとの関係ばかりでなく、オーストラリアやオランダとの新しい関係が生まれたのもその結果であった。

三十年前、フランク・ブクマンは同志の人たちにこう言った。「大陸大でものを考えることを学ばねばいけない」と。彼は自らこう語ったことを一貫して実行していた。

北米や、ヨーロッパの事ばかりでなく、アフリカやラテン・アメリカやアジアやオーストラリアのことを常に心にかけていた。スイスのコーやアメリカのマキノ島で行なわれた大会での彼の演説にはこのような遠くにいる国の人びとのことや又そこにいる友人たちのことを考えた発言が多くなされたのも、彼のそうした姿勢を反映するものであった。

(一) イデオロギーの戦い

今日、わたくしは世界で影響力を与えている力強い勢力について語ろうと思います。六十何年前には、共産党というものはたいして知られていませんでした。まず最初に、カール・マルクスという一人の人間がいました。それから長い間、小さなグループが存在したにすぎません。ところが、世界情勢はカール・マルクスに有利に展開してしまいました。その結果が今日の共産主義です。

今日、世界におけるロシアの立場を考えてごらん下さい。ロシアは地球の六分の一です。わたくしはロシア皇帝が、ニメートルごとに見張り人をおかないことには、馬車に乗って往来することができなかつた時代を覚えています。鉄道で千マイルもの長い旅をするにも、いつも沿線に見張り人をおいたものです。そうしたことも共産主義と称するものを、たやすく産み出す原因の一つです。

今日のロシアはなかなかよくやっていますし、アメリカは大いに援けています。ドイツと対抗するのに、今の時点では決定的な要素のようですし、また将来も、支配的勢力をもつようになると思われるからです。

これを一つの絵と考えましょう。それを金ぶちの立派な顔にはめたらよいでしょう。また赤色もせいぜい使ったらよいでしょう。だが、そうしたからといって、それで共産主義が処理されたことにはなりません。そんな生やさしい勢力ではないのです。

もう一つの勢力をとりあげてみましょう。ファッシズムについて私たちが初めて耳にしたのはいつでしたか。一九二一年から二二年にかけてです。ここでもまた最初にムツソリーニという一人の男がいました。わたくしはイタリヤのミラノへ行つたとき、壁や塀に「共産主義万歳」と書いてあったのを覚えています。ところが間もなく、やはり壁や塀に「ドゥーチェ万歳」の文字が見られました。共産主義に反抗する勢力としてムツソリーニが出現したのです。彼はローマへ進軍しました。そして政権を握つたとき、ファッシスト勢力が生まれたのでした。それから当分の間、人びとは安定と繁栄を歓迎していました。「よかつたノムツソリーニが現われ、ファッシズムになって汽車はダイヤどおりに動く。街に乞食はいなくなつた。秩序もよくなつた」と人びとはいいました。

ところが今日、ムッソリーニはどうなりましたか。

一九二〇年代のドイツは、未曾有の衰退期にありました。多くの住民は食べるものも、何もなかったのです。何年かの間、崩壊と革命の危機はつづきました。

そこへ、きわめてはつきりした思想をもつヒットラーという一人の男が現われました。彼は牢獄に在る間に、その考えを本に書きました。出獄したころは群衆が騒いでいたし、秩序は乱れ、虐殺も行なわれていました。

無秩序のドイツに彼は秩序らしいものを与えました。世界における彼の地位は次第に高まりました。ドイツ人は「ハレルヤー」と讃え、「ハイル・ヒットラー」と叫びました。それから先はご存知のとおりです。

このようにして共産主義とファッシズムという二つの世界勢力ができましたが、その源泉は何でしょう。すべての主義の母である物質主義イイズムから生まれたものです。物質主義こそは民主主義の最大の敵です。

これらが世界を支配すべく猛威をたくましくしつつある勢力です。

一九三八年に、わたくしは道義と精神の力が、強調されなければならない、道義の再武装——M.R.A.——という考えを得たのです。現代に必要なのは道義と精神の力です。この事実を国々

に知らせることが私たちの使命です。私たちはロンドンのイースト・ハム公会堂でこの考え方を発表しました。そして各国に伝え出しました。M R Aはその年に生まれたのです。

共産主義とファッシズムは、否定的なもの、すなわち分裂を生む物質主義と混乱の上に築かれたものです。M R Aの行くところには、必ず建設的なメッセージが生まれます。その目指すところは、国民生活の指導力として神の指導権を回復することです。

アメリカはその正当なイデオロギーを見出さなければなりません。それは祖先伝来のキリスト教的伝統から来るものであって、物質主義、その他すべての主義イイズムに対する戦いにおいて、アメリカの唯一の解答となるべきものです。ところがアメリカは物質主義を憎んでいないのです。アメリカが、他国を悪いと非難するものと同じもののために、自分自身が滅ぼされるとしたらどうでしょうか。イデオロギーの戦いは新約聖書、旧約聖書の基礎となるものです。ところが近頃は肝心なものを与える代わりに飴を与える人が多いのです。ですから物質主義を癒やすことができないのです。

M R Aは何よりも先に、根本問題について、罪を指摘します。罪が病患です。イエス・キリストが癒すのです。その結果は奇蹟です。あなた方はこのマキノ島のような訓練センターへ来て、「罪なんていうことを聞きたくない」というかもしれません。いやでも罪は指摘されなけ

ればならないのです。ただ、それがどんなものであるかを知るだけでよいのです。それがわかったら、さきへお進みなさい。罪を見たら直ちにそれを認めて、[〃]変わる[〃]だけの感受性を持つべきです。変わることが、またもう一つの奇蹟です。昔、あなた方の祖父母たちが、罪について卒直な説教を聴くことを喜んで、水曜日の晩ごとに教会へ行つたように、今日もやるべきでしょう。時間がないなどといわずに聴く必要があるでしょう。いづれにしても、罪を最小限度に考えてはいけません。最大限に考えるべきです。しかし、わかつたら、すみやかに改めることが大切です。変わる、融合する、——それが自然の順序です。

あなた方はここで、古くからの根本的な真理を見出すでしょう。ただそれが非常な強さで与えられるのです。個人も国家も利己主義や便宜主義を当然のこととしてこの時代に、MR Aは絶対の標準を復元しようとするのです。正直、純潔、無私、愛、これが四つの絶対です。あるいはあなた方の中にはそんなものは大して尊重しなくなっている人がいるかもしれませんが、国民が健康であるためには、こうした単純な、基本的な標準をせひ持たなければならぬのです。

第一番に、正直ということを考えてみましょう。わが国の現状はどうですか。たとえば、軍需品契約などで不正を働いた人がいませんか。汚職とか闇商売などのために沢山の人たちを忙

しい目にあわせて、国民に巨額の負担をおわせているではありませんか。昔は不正直をよくいったものはなかったのです。今日はどうかといえ、不正で大儲けをした人間は、かえって珍重がられるかの観があるのではありませんか。

つぎに純潔ということを考えてごらん下さい。それは、個人的問題だと皆さんはいうかもしれませんが、この国の現状はどうでしょう。国に偉大な浄化力をもたらそうとする人は、あまりにも少ないのです。それをもたらずものが全くなかったら、国はどうなりますか。破壊された家庭、安定を失った子供たち、文化の頹廢、革命の苗床――。

無私と愛とはどうですか。人びとは無私であろうともしないし、愛をもとうともしません。多くの人びとは、この四つの標準は馬車時代の遺物ぐらいに考えているのです。だから国家として、そのようなことを問題にしようとしません。そのおかげで、世界の現状はこんなことになったのです。今、これらの絶対標準を生き抜こうと決意する人びとを得ることができれば、何ものも否定することのできない創造的な勢力を国内にもつことになります。

道義を強調すると同時に、イエス・キリストの救いの力ということをお忘れてはなりません。そのことがわかれば、ほとんど忘れられてしまった原動力―聖靈を体験するでしょう。聖靈こそは、あなた方に「導かれた答」を与えて神の明晰な直接の声として、何をなすべきかを正

確に教えてくれるのです。

それが今日、教会に与えられた役割です。わたくしは心の底から革命の焰に燃える教会に期待をかけるものです。私たちはまだ必要な精神的革命を体験し始めていません。私たちは革命を必要とします。そしてあなた方が神の光の前に立つとき、輝かしい精神復興スピリチュアル・リバイバルを体験するでしょう。そして、キリストが、この古い世界をどうしようと思っているかを理解するでしょう。

この事実を知ることが大切です。しかし、それ以上のことがあるのです。それはこの事実を国家大に拡大することです。

あなた方の中には困った人がいます。あまりに理想的で、希望していることが自分の家族間においてすらも実現の見込みがない、というほどの理想家があります。国際連盟もそうでした。人びとはあまりにも“連盟心理”に埋没して、連盟が最も必要とした事柄、すなわち人に“改変”チェンジをもたらすための個人を相手としての仕事をしなかつたのです。連盟からは大切なあるものが置き忘れられていたのです。それは神です。国際連盟はついに神を戴かなかつたのです。

一人びとりが神を奉戴する最上の案を見出すべきです。それが見つければ、私たちのためばかりでなく、戦後のヨーロッパのためにも最上の案が得られるはずです。私たちは自分では考

えようともしないで、政治家に、すべて考えさせておいて、それをデモクラシーと呼んでいることに問題があります。

自分の都市について考えてごらんなさい。指導的立場の人に対してやり方が悪いとか、いろいろ不平をいいますが、そういう指導者を可能にしているのは、各人の利己主義ではないでしょうか。進んでそれを矯正しようとせず、退いてそれを我慢してるところに問題があるのです。祈るかわりに、金で解決をつけようとしているのです。自ら改変して解答を得るよりも、混乱をつづけ、ぶつぶつ不平をいいつづけようというわけです。

アメリカのための戦いはアメリカ人の心の戦いです。普通、国が荒廃する前に、国民の考え方が荒廃するものですが、アメリカの考え方は、すでに荒廃しています。

人びとは、左だとか、右だとかということを問題にして迷っていますが、私たちが本当に必要とするものは、神の聖霊に導かれるということだけなのです。それが私たちの研究すべき力です。それが得られれば、私たちは混乱に終止符をうつべき光明を得ることになりましょう。聖霊は私たちに如何に考え、如何に生くべきかを教えると同時に、国家に奉仕する具体的な基礎を与えてくれるのです。

アメリカは祖先伝来の道義的遺産の大部分を失いました。私たちが道義的雰囲気^{モラル}に重きをお

かなければ、私たちのデモクラシーがどういうことになってゆくかを考えてごらん下さい。私たちの中には、自分のことにかかりきっていて、国のことを考えるのを忘れている者もいます。アメリカが正しいイデオロギーを取り戻さなければ、私たちの前途に待っているものは混乱だけです。神の導きに従うことが、私たちの天命です。

今日、世界における真の戦線は階級の間でも、人種間にあるのでもありません。真の戦いはキリストとキリストにそむくものの間にあるのです。あなた方はそのどちらに奉仕しようとするかを今日、ここで選ぶべきです。

(一九四三年七月アメリカのマキノ島にて)

(二) 世界再建の唯一の希望

全世界は解答を求めています。すぐにそれが得られなければ、特定のどの国ということなく、すべての国が容易ならぬ破局に直面するでしょう。

あまりにも長い間、私たちは問題に満ちた雰囲気になれてきました。会議から会議へとさまよいつつ、根本的な解決の望みを失っています。私たちは成功を信じなくなつたのです。個人的にも、国家的にも失敗の奴隷になりきつていゝるのです。

各国は解答のないまま、その成果だけを望んでいます。生産がほしい、平和がほしい、繁栄がほしい、世界的な機構がほしい、融合されたヨーロッパがほしい、新しい国民生活がほしい、だが一向にことの根本をつこうとはしないのです。

適切な解答を与えることをしないで、ただ際限なく危機を叫びつづけることはかえつて無感覚の習性を生みます。私たちは人類を今日の恐怖の濃霧と憎しみの深淵の中から救い出さねば

なりません。

国ぐにの問題がうまくいかないのは、ただ夢中になって、経済計画で道義的無感覚に対処しようとするからです。経済の破局は、すべての政治家と国民の心に、まっ黒な脅威となって広がっています。しかし、物質的危機はその底に横たわる物質主義と道義的崩壊とをおおい隠しているため、それを治療する方法がわからないのです。

私たちが国家的規模において人間の性質を徹底的に変えない限り、各国は暴力と破壊への歴史的道程を歩まねばならないのです。問題は国と国とをへだてる単なる鉄のカーテンではなくて、人と人とをへだて、すべての人を神の支配からへだてる鋼鉄のような冷酷な利己主義なのです。しかし、人が神に聴いてそれに従えば鋼鉄も溶けるのです。

一世代前、物質主義的イデオロギーを信奉した一団の人びとが、世界を掌握しようとして決心しました。彼らはその仕事に献身して、世界的規模で、二十五年の間、寝てもさめても休みなく、巧みに、容赦なく働きつけました。民主主義諸国の政治家たちは急に目をさまし、目をこすりながら、あたりを見まわしました。物質主義の世界勢力は、すべての国に浸透し、学校にも工場にも食い込んでいます。事務所にも、政府部内にも浸入し、家庭にも、同僚にも、自分自身にさえも影響をおよぼしています。

危機が迫っていることが、やっとわかり出したのです。世界の混乱と支配とを目指して進軍する組織され、体系化された物質主義が、大きな進展を示していることに気づき、人びとはいぶかりながら、「これはどうした情勢か、どうしてこんなことになったのか」といつています。理由は簡単で、多くの人びとが眠っていたり、自分の仕事にばかり没頭している間に、物質主義者らは哲学と情熱と計画とをもって営々として革命を育ててきたのです。

それに対する解答はなんですか。一世代前、M R Aの勢力もまた戦い始めたのです。世界大の戦線で、計画には計画をもって、思想には思想をもって、戦闘的無神論的物質主義にはデモクラシーの戦闘的啓示的イデオロギーをもって答えてきました。

この思想は人の心を捉え、人びとは造り変えられました。それは一国、また一国と影響し、今や地球のいたるところにおよんでいます。

今日、このコーに開かれたM R Aの大会において、私たちはこの勢力が直ちに役に立つ解答をもって行動しつつあるのを見るのです。政治家たちが時のおそきを悟り出しているときに、M R Aは二十五カ年にわたる労作の成果を喜んで提供しています。それは思想の戦いにおける一つの勢力です。神の下で政治家に、一般の人に、国家再造に役立つイデオロギーを提供できるように訓練された勢力なのです。

新たなメッセージがコーから悲嘆にくれた世界に送られます。コーで発見された解答には脚が与えられて、今や行進を開始しているのです。このコーで私たちは危機の時代に終止符を打ち、平和の時代を開拓しようとしているのです。

先週末、あるインドの労組の指導者がコーへ来て、インドにつきまとう二つの問題、人種間と階級間の憎しみについて話していました。解決のメドは無いということでしたが、一日たった後で、解答が見つかったといい、その次に来たときにはこういいました。「問題は道義的無関心にあるのですから、M R Aが答です。私はここで悲劇を生まない生き方を知りました。私自身この生き方をすれば、私の生活は効果的になるし、人の生活を効果的にすることもできることがわかりました。これこそチャンスというものです。一人から多数へ、数千人が数百万人になり、世界を悲劇から救うことも可能です。」

彼の言葉は世界を救い得る政治家のあり方への鍵です。どこから着手すべきかを教えています。M R Aはすべての人、すべての国のためなのです。

人間性は変わることができる。それが解答の根本である。国家経済も変わることができる。それが解答の成果である。世界歴史も変えることができる。それがこの世代の使命である。

正直に事実を直視しようではありませんか。新しい会議を開いたとて、偽りの哲理に対する

解答にはなりません。新説を出したとて、戦闘的イデオロギーに対する解答にはなりません。計画が失敗に終るのは、靈感によって実行する人びとがいらないからです。計画だけが次から次へと作られます。しかし、コーでは計画を実行し得る靈感にふれた人間がつくられるのです。ある政治家がコーへきました。その人は商工会議所の会頭でしたが、何年間もイギリスに対する憎悪で心がいっぱいでした。その感情の激しさは二度と公式の席上で英語をしゃべるまいと誓ったほどでした。

ところで、彼は一連の事件にかかわり合いました。それは自国を内乱に導き得るような危機をはらんでいたものです。その時のことを彼は私どもに英語でこう話しました。「神を知らず、信じもしなかつた私でしたが、神の奇蹟を行なう力を知ろうとの誠意さえあれば、白熱化するほど強い憎悪心も一瞬にして除き得ることを体験しました」と。正直な謝罪が本当の平和を勝ち得るといふ秘訣を学び、そのために目前にせまった内乱をさけることができたのです。この政治家の心に起こった変化と神の導きとは、その国で分裂的要素であった彼を協力の先駆者にし、自分と同人種ばかりでなく他人種のためにも効果的に生きる道を教えたのです。心の変化。卓越した政治力。私たちがひとしくさがし求めている解答はこれではないでしょうか。生まれ変わった人たちは、国ぐくに精神復興をもたらしています。MRAの解答をもった力

を中心にした産業は、万人の必要に應ずるように生産するでしょう。

日常の生活にこの解答をもった家庭は、次の世代を混乱から救うでしょう。この解答をもった軍隊は道義的訓練という新しい標準を国に与えるでしょう。大臣や外交官がこの解答をもてば非常に効果的になるでしょう。敵を変じて友とする力をもつから、ヨーロッパも世界も眠りと無感覚の敗北と幻滅から立ち上がるでしょう。これが世界再建の唯一の希望です。

（一九四七年七月、コトで開かれた第二回世界大会での講演。コトのセンターは戦後何百人のスイスの人たちの犠牲的献身で与えられたもの）

(三) どちらを選ぶか

いたるところで、人びとは平和を求めながら、戦争の準備をすすめています。人びとは再建を望みながら、破壊にそなえています。新しい繁栄を計画しながら、新しい災難の起こることを予想しています。

今日の世界の計画と方策とに欠けているものは、一体何でしょうか。それはデモクラシーのイデオロギーです。私たちはよく民主主義者であるからイデオロギーなどはいらないといいますが。そしてイデオロギーを云々することすら何か弱みを見せるかのように思っています。

その結果、私たちはデモクラシーと相反するイデオロギーの団結した戦略と情熱に対して、わずかに口さきだけで高遠な理想を唱えるのに終っているではありませんか。そして最後にはただ武力に頼ろうとしています。そして、今まで通りの身勝手な、安逸な、邪魔されない生活をつづけようとしているのです。

私たちはあまりにも長い間、安全、繁榮、安樂、文化の恩恵などというものが、人間に自然に与えられるものだと思ひ込んできました。

私たちは善と悪との不斷の戦いを忘れて居るのです。善の勝利によつてのみ安全と繁榮もたらされ、この戦いに敗北することはおろか、この戦いに無関心で居ることすら、貧困と飢えと奴隸状態と死とを招来するのです。

悪を根治するためには外交手腕だけでは足りません。神のために戦うことは口さきだけでは足りません。政治家は解決の道を口にします。融和を口にします。しかし、分裂は増すばかりです。彼らは道義的なものの価値について論じますが、政策には不道義的なことが蔓延して居るではありませんか。彼らは歴史がすでに証明して居る眞実を語りますが、あくまでそれは言葉としてのみ終つて居るのは何故でしょう。自分の生活においても、国家としても、問題解決のために当然払わなければならない代償を払おうとしないからです。

極端な悪の力には、徹底した善の力で対抗しなければなりません。狂言的悪への追従に対しては、情熱的な善への追求でなければなりません。

今日の世界でデモクラシーが次つぎと敗北する理由はこれです。情熱に対処できるものは情熱以外にはないのです。両立しないイデオロギーによつて分割された世界を救うものは世界を

一つに包含できる、より優れたイデオロギーだけです。

私たちアメリカ人は、イズムの戦いはすべて海のむこう側に属しているのだというような間違つた安全感にひたっているようです。イズムというものは人と国とに未解決の問題があるときに起きてくるものです。一人の人の心の中に残されている憎しみの感情は百万の憎しみをかりたてます。一人の人の猜疑心は百万の猜疑心となって爆発します。ちやうど大草原の火のように燃え拡がり、時としては地下の焰のように潜行して予期せぬ数百カ所から噴出することもあります。

アメリカの離婚率は、何故こうも高いのでしょうか。産業界の闘争はどうでしょうか。

あらゆるイズムの中でも最大のイズム、物質主義に食い荒されているのではないのでしょうか。物質主義こそ、あらゆるイズムの母ではないのでしょうか。物質主義がアメリカの信奉するイデオロギーになっているのでしょうか。

私たちはヨーロッパやアジアに経済的援助の手をさしのべています。しかし、物質主義は私たちの最良の意図をも失敗させます。物価が暴騰し、貨幣価値は下りつつあります。産業界の紛争は生産の減退を来たしています。外国援助のためアメリカの力が最も必要とされるときに、私たちは今までに見たことのないような危機に直面することになるのではないのでしょうか。

十年前にMRAが生まれました。そのとき、ここハリウッド・ボールに人びとは世界の新し

い秩序の予告篇を見るために集まりました。

この十年間に私たちは何を学んだでしょう。

私たちはイデオロギーをもたないデモクラシーが武力戦には勝ち得ても、平和を打ち樹てることはできないということ学びました。これこそ道義的、軍事的、経済的観点からしても、国力の唯一の確実な基礎でもあるのです。

今日、M R Aは過去十年の間に、物質主義をも含む、あらゆるイズムに対する解答として世界的になりました。M R Aによって家庭を守り、名誉を全うし得た人は百万を越えています。そして、新しい世界に対する希望を与えました。しかも、この希望を実現させるため、世界的な規模の有機体をつくって来ました。

スイスのコーで開かれたM R A世界大会に指導的立場のドイツ人一五〇人が来ました。これはベルリンにいるアメリカのクレイ將軍とロンドンのバケナム卿との肝入りの結果です。これらのドイツ人たちは虚無主義および思想的に打ちひしがれた国民への解答を見出したのです。元州知事で有名なドイツのある社会党員は「ヨーロッパを救うにはM R Aの精神をもってしなければならぬ」といいました。

これらのドイツ人の手で戦後初めてドイツに対する解答をもつ民主主義的イデオロギーを伝

えるパンフレットが書かれたのです。これは鉄のカーテンの彼方にまで撒布されています。スウェーデンはこのパンフレットを印刷するために、百トンの紙を提供しました。この新しい精神がドイツに与えられることこそスウェーデンの安全だと感じたからです。

ここ数年間、イデオロギーの戦場となっているフランスの産業界は、融合できる力をMRAに見出しています。六十万人の労働者を擁する経営者団体の責任者で長年反労の旗印を高くかかげていた男がいます。一方、フランス社会党の婦人部長で経営者側を猜疑心をもって見守っていた婦人がいますが、この二人はこの度、新しい戦いの目標、デモクラシーを活かす真のイデオロギーのために戦うという目標を見出しました。二人が出合いました。ともに改変し、相手にあやまりました。そして今では肩を並べて働いています。何千もの人が二人に共鳴して集まって来ます。彼らは、革命や反動を語るのではなく、精神復興を語るようになりました。国の生まれ変わり、全大陸の生まれ変わりについてです。

イタリー、世界が心配して見守っているこの国から昨年の夏、MRAの大会に五つの政党を代表する二十六名の国会議員を含む二百名の人 came ました。キリスト教民主黨員と社会黨員が協調することを学びました。

「これは奇蹟です。私たちが協調できたと同じ精神で党も協調できるでしょう」と社会黨員

がいました。イタリーの選挙のかけの一つの秘話といえましようか。

以上述べた明朗なニュースに共通しているものは何でしょうか。融合です。これは現代の困難な諸問題の解決に大方忘れられているものです。

分裂は現代の特徴です。心の中も分裂しています。家庭も分裂しています。産業も国内も分裂していれば、国と国の間にも分裂があります。融合こそ、いま直ちに必要なものです。分裂は人間の傲り、憎しみ、情欲、怖れ、貪欲の所産です。分裂は物質主義の商標です。融合は生まれ変わることを通じて得られる恵みです。私たちは生まれ変わる秘訣を忘れたので融合の術を見失ったといえましよう。

M R Aは、すべての人びとが融合できる神によるイデオロギーの善い道です。カトリック教徒も、ユダヤ教徒も、プロテスタントも、ヒンズー教徒も、回教徒も、仏教徒も、儒教徒も、みな変わる必要がある時は変わり、そして皆が一緒に歩くことのできる道です。

神はあらゆるところのあらゆる人に向かって融合をもたらず器たるべく呼びかけておられます。融合は会議や法律や決議文や敬虔な希望によってくるものではなく、チェンジ 改変を通じて与えられるものです。

チェンジ 改変こそ、この優れたイデオロギーの真髄です。

個人が変わるときに、国中に新しい生活の雰囲気がかもし出されるのです。各界の指導者が変われば、国の政策は昇華され、その国の生命の泉は再び流れ出すでしょう。世界の政治家が変わるとき、戦争と混乱の恐れはとり除かれます。どんな頑固な者も、生まれ変わった、しかも謙虚な、かたく融和した民主主義の声には耳を傾けるでしょう。

神と歩めば、必ずルネッサンスが来るであろうに、なぜ破壊への道をたどる必要があるでしょうか。

これこそ、すべての国に役立つ新しい型の自由です。ヨーロッパおよび全世界は再び暗黒時代に閉ざされるでしょうか。あるいは最後の瞬間に、人類に奇蹟のように道義的、精神的は世界大のルネッサンスがもたらされるでしょうか。どちらになるべきでしょうか。その決定権は、あなた方の掌中にあるのです。

(一九四八年六月、ロスアンゼルスにおけるMRA十周年大会において)

(四) 改変チエンジの全容

M R A は東西を問わず、人の変わるチエンジることによって人びとを融合させる偉大なる力をもっているのです。それはあらゆる面で改変チエンジをもたらしめます。経済的な変化、社会的な変化、国家的な変化、しかも、すべてが個人の改変チエンジを基礎としているのです。M R A は国の運命を変え得るような個人の考え方を創り出します。それは世界を再造し得るほどの力をもっています。国と国とを融和させる道を示し、家庭においても、産業界においても、政界においても、国のレベルにおいて、啓発された民主主義を創り出すのです。それは国が考え、生きるために必要な啓発された日常の生き方なのです。M R A は神の心を心としています。

北ライン・ウエストフェリヤ州知事カール・アーノルド博士は次のようにいっています。「
イデオロギーに答え得るものは、より優れたイデオロギーしかない。ドイツは新しく発足した
デモクラシーを裏付けるような優れたイデオロギーを必要としている。M R A は新しいヨーロ

ツバに通ずる精神的な道である。わたくしの政府では、すでにこのイデオロギーのよい結果があらわれている。このイデオロギーこそは、私たちの国に必要な道義的、精神的な癒しをもたらす、かつ他国との間に平和を保つ真の基礎となり得るものである。世界の各国が確信と情熱をもって善い道を求めるときに世界は新しい出発をなすであろうとわたくしは信じている。」

彼の同僚でパバリヤ州の元知事エハード氏は、この言葉にこたえてM R Aについて次のようにいっています。「世界はこのようになり得るし、なるべきであり、ならせねばならない。」

これはすべてのところのすべての人のために役立ちます。人びとは安定した生活を願っています。憎しみや、怖れや、貪欲のない世界を願っているのです。人間性は変わることができません。憎しみや、怖れや、貪欲のない世界を願っているのです。人間性は変わることができません。人びとは安定した生活を願っています。憎しみや、怖れや、貪欲のない世界を願っているのです。人間性は変わることができません。そして国の性質も変わるのである。

ドイツのイギリス占領地区の労評議長、ハンス・ベックラー博士もこの集会に出席していました。彼は「人びとが過去や、時代おくれの考え方から解放されたいと望むなら新しい目標をもつべきである。人間愛と道義的価値をすべてに先行させるとき初めて可能となります。わたくしはM R Aが人間生活の幾多の面において決定的な改革をもたらすことを信じます。人びとが変わるとき、社会機構が変わる。社会機構が変われば、また人びとも変わる。両者は相俟つものであり、ともに必要である。わたくしが組合員として全力を傾注して実現しようとしてい

る目標と、M R Aの目標は合致するものである」といいました。フランス社会党元婦人部長ロール夫人に聞いてみましょう。「わたくしはドイツ人を憎む十分の理由をもってコーに來ました。しかし、奇蹟が起りました。M R Aを生活に活かしているドイツ人に会ったときわたくしの憎しみは消え去りました。第一次と第二次大戦の中間期間にドイツとフランス両国に如何なる感傷主義ももたらし得なかつたことを、両国共通するこのイデオロギーが達成しています。今や両国ともに真心で理解の橋渡しをしようとする、確固とした基盤を得ました。」

なぜM R Aが解答であるかといえば、根本を癒すからです。あるアメリカ中部の農夫が次のようにいいました。「わたくしは旧約聖書を読むたびに、なぜ神さまは人びとに語るのをやめなされたのかと不思議に思ったものだったが、M R Aを知って、やめたのは神さまの方じゃなくて、人間が聴くのをやめたのだということがわかりましたよ。」

「現代人は自分の罪のことは一向気にしないが、そのためか、ずい分多くのことにわずらわされている」といった人がいます。

M R Aは罪ということをまじめに取り上げます。キリストをまじめに考えるのです。ドイツのウルム・ピショップは次のように書いています。「M R Aでは人びとはキリストの十字架をあまり口には出さないが、その力を生活の基礎にしている。その影響が強く感じられる。その

ために党派や、国ぐにや、異宗派同志を融合できるのである。」

ある労組の指導者がいっています。「MRAは新しい労働組合ではない。新しい宗教でもない。新しい世界を実現するための共通な戦いを通して生まれる療法である。」

(一九四九年六月、コーからの世界放送)

(五) 革命の道

十二年前、わたくしはフロイデンシュタット近くのブラック・フォレストの森を散歩していました。世界はまさに波瀾の極に達しようとしており、今日と同様に人びとは平和を望みながら戦争の用意をしていました。

森の静けさの中を歩いていると一つの考えがくり返し心に浮かんできました。「道義と精神の再武装、道義と精神の再武装（モーラル・リアーマメント）。次に来たる世界の大運動は各国の道義再武装を図る運動である」と。

その後数日して、わたくしはロンドンに行き、イギリス労働運動の発祥の地、イーストエンドに行きました。そこからM R A（道義再武装）は世界に拡がって行ったのです。新聞が書き立てました、ラジオが放送しました。十二年後の今日、世界の各地で国々にM R Aを計画するため集まっています。ロンドンの労働者は港湾労働者とともにポプラー公会堂に集まって

います。パーミンガム公会堂ではイギリスの重工業と炭抗関係の労使代表が集まり、グラスゴーではクライドサイドの造船労働者が大会を開いています。

メッセージが数日前から到着していますが、オーストラリア、ニュージーランド、インド、南アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ各地、日本、極東各地からきています。

神に与えられた思想が勝利を得る秘訣は何でしょう。わたくしはまた世界の何千何百という平凡な男女が、非凡なことをなし得るのは何故でしょう。

極端な自己中心主義者か、盲目でない限り、今日の世界を今のままでよいと思う者はいないでしょう。私たちの多くは世界を変えたいと思っています。問題は大部分の者が自分勝手な方法でそれをやりたいと思っていることです。

ある者は正しい診断を下しますが、治療法がまちがっています。彼らは神を認めず、人間性の改変を無視するので、結果は混乱、悲哀、戦争となるのです。また、ある者は、理論的に立派な解答をもっていると思っ^{ナヒシ}ています。しかしいつも先ず誰かが、また他の国がそれを始めることを希望しているのです。結果は焦燥と絶望とであります。

正しい診断と正しい治療が一緒に与えられるとき、奇蹟が生まれます。人間が変わるとき社会が変わるのです。

この点をわたくし個人の体験で説明しましょう。四十二年前のある日、わたくしが体験したことです。突如としてわたくしはわたくしの中の傲り、利己心、失敗、罪をはつきり見たのです。「己」という一字がわたくしの生活の中心になっていたのです。わたくしが変わるためには、その大きな「己」という字が消されなければならないのです。六人の人に対する恨みの感情が、心の中に墓標のように立っていることがわかりました。

わたくしは神にわたくしを変えて下さいと願いました。神はわたくしに六人の人と和解せよと命じました。わたくしは神に服従して、六通の謝罪の手紙を書きました。

その同じ日に神はわたくしを用いてひとりの人を改変しました。そこで神に従えば奇蹟が起こるといふことを悟りました。人が聴くとき、神が語り、人が従うとき神は働く、人が変わるとき、国も変わります。

この革命的な道をわたくしは四十二年前に踏み出しました。今では幾百万の人が歩いています。そして今日、わたくしはみなさんにもこの道を歩くことを挑戦したいのです。

みなさんは何のために生きていますか。みなさんの国は何のために生きていますか。利己的な個人と利己的な国家は、世界を全面的破壊に導きます。新しい型の人、新しい型の政治家、新しい型の国策―それが現在、最も必要なものです。この目的のためにMRAは生まれ

ました。

この春、若い、富も地位もある有望なスイスの技師が、家族と友人を残して亡くなりました。彼もわたくしと同様に生命と財産とを投じて、キヤンパ 改変を土台とした新しい世界再造の秘訣を発見していました。彼は妻や子供と一緒に、世界のM R Aセンターとなるコーの実現にすべてを捧げました。彼が僅か五年間に多くの人が一生を費してもなし得ない大事業を完成したことを、人びとは今となって認め出しました。

この若いスイス人は、今から七百年前に世界を変えるために、名声も職もすてて、持てるものすべてを与えたある青年の足跡を踏んだのです。彼はヨーロッパに新しい生命を与え、その一生は今にいたるまで幾百万の人びとを感動させているのです。その名はアツシジの聖フランシスです。この若いスイス人の技師は聖フランシスの詩を日々愛唱していたと彼の妻はいつています。この詩こそ、世界を変える鍵でもあります。

神よ、汝の平和を

もたらす器とならせたまえ。

憎しみのある処に 愛を

敵意のある処に 赦しを

紛争のある処に 調和を

誤謬のある処に 真理を

疑惑のある処に 信仰を

絶望のある処に 希望を

暗黒のある処に 光明を

悲哀のある処に 喜悅を

与えるものとならせたまえ。

わたくしの主よ

慰められる者となるよりは

慰むる者と

理解せられる者となるよりは

理解する者と

愛せられる者となるよりは

愛する者とならせたまえ。

さらば、与えることによつて

与えられ

生命を失うことによつて

生命を見出し

赦すことによつて

赦され

死することによつて

永遠の生命に

甦えり得ればなり。

（一九五〇年六月、ドイツのゲルセンキルヘンにて。

独仏の理解を深めた功績によつてブツクマン博士はフランス政府からリジョン・ドノール勲賞を授与された。その祝宴にドイツのルール炭坑夫とその家族が列席したが、その席上で語つたもの。）

(六) 電撃的な衝撃が必要です

電撃的な衝撃が必要です。おそすぎないうちに、人びとをも国々にをも正気にたちかえらせるものが重要です。最も頑固な人たちをも融和し得る強力なものが重要です。

わたくしは初めて電燈がついた時を覚えています。それは私たちの生活を革命化し、将来に對する人びとの考え方を変えてしまいました。今日あらゆる国のあらゆる家庭の最も困難な問題に解答を与えるような発見があるでしょうか。

ある人がワシントンから会いにきました。いろいろ話をしたあとで、彼は「わたくしは専門家たちとあらゆることを討論しますが、一番大事な点をぬかしていません。M R Aはその点を処理するのですね」といいました。次の朝、彼はワシントンの上役に電話をし、そして、彼に對する非常に深い恨みについてあやまったのです。「私たち自身の中に分裂があるのに、世界の融和を口にしたとて何になるでしょう。わたくしは自分が正しいと思つてあなたを恨んでい

ました。わたくしはあなたに対して正直でもなかったのです。お許し下さい。」と彼は電話でいったのです。

ワシントンからきたこの人の考え方を変えた光と、この人に何をすべきかを教えた力の源は、誰でもがふれることのできるものです。

その力にふれられないのは人間の利己心のためです。これが電流を切るのです。したがって、暗闇となり、人が方向を失うのです。利己心を除去すれば、すべての家庭も、すべての内閣も、解答を送りだす発電所になることができます。

私たちは、私たちの文明が破壊される真只中に生活しています。家庭でも、産業界でも、国と国との間にも、戦いがあります。将来はどうなるでしょうか。さらに崩壊と混乱と無政府状態と独裁性が増大するのでしょうか。それとも人間の性質に革命的な改変チェンジをもたらすことによって新しい社会が生まれるのでしょうか。今日の世界で最も強力なのは聖霊の力です。人間は原子を分裂することができます。聖霊は、神に聴き従う人たちを通して、人類を融合しています。これは日々の経験とならなければなりません。それは実際的です。効果があります。

根本的な戦いは人間の意志の戦いです。これがイデオロギーの戦いです。これはあなたの心の中で、わたくしの心の中で毎日行なわれる戦いです。軍隊も、協定も、経済的援助も必要で

すが決定的なことは、人および国が物質主義の聲に導かれるか、神の聲に導かれるかなのです。

(一九五二年六月、マキノ島にて)

第四部 すべての処のすべての人のために

フランク・ブックマンは、M R Aを通して世界をかえることができると確信した。M R Aはどの誰にでも役に立つ。「すべての人を包含できないような考えは現代には、小さすぎる」といい、そしてだれもが世界を再造する者になるという呼びかけをした。そして、世界を再造するという、これこそが神が人間に与えた使命だとブックマンは信じていた。この使命のために、みずから捧げる用意のできている人には、神は必ず導きを与えられる。ブックマンがくり返し、くり返しいったことは、「今日の世界で最も強い力は聖霊であり、これは神の声に耳を傾けて従う人の生涯を方向づけるものだ。この力をもっとわれわれは、学ぶべきだ」と。

ここに収録された演説はブックマンが七十五才になった一九五三年からインド、セイロン、カシミールとパキスタンに、二百名にのぼる国際勢力をひきいて訪問し、つづいて、エジプト、イラン、トルコ、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、日本、ヴェトナム、タイ、

ビルマ、エジプト、モロッコ、さらにアメリカ、カナダそしてヨーロッパの国々にを巡歴した時のものである。

ブックマンは特に、ながい年月にわたるアジア各国の指導者及び一般の人びととの友情を大切にしていた。

一九五〇年、フランスのロベール・シューマンは、ブックマンの演説集の仏語版に序文をかいた。シューマンは当時外務大臣であり、のちに総理大臣となった人で、シューマン計画の創案者である。シューマンはその序文の中で、「これが福祉のための新しい計画、あるいは新しい理念であったなら、私は懐疑的になるだろう。しかし、M R A は実行にうつされた実践哲学を我われにみせてくれた。それは長期にわたる社会の改革をもたらすものであり、その第一歩はすでにふみだされている」と。

(一) パン・平和・希望

人はパンと平和と新しい世界秩序の希望とに飢えています。

神によって導かれた融合の前には、どんな問題でも解決されません。手には職が与えられ、空腹には食物が与えられ、空虚な心には満足を与えるイデオロギーが満たされます。それがM R A がしようとしていることです。それは無信仰の者に信仰を与えますが、そればかりでなく、信仰をもつてゐる人たちが、町をも国をも変えてしまうように、その信仰を生きるようにさせます。

その国民がお互いに十分に思いやりをもち、お互いの必要を満たすように分けあう国は、新しい社会経済の秩序の模範を、現在のためにも将来のためにも創るでしょう。

国自体が平和であるとき、初めてその国は、世界に平和をもたらすことができます。

何が正しいかを、個人的にも、産業的にも、政治的にも、国家生活にもつらぬく国は、全人類の進歩の上に、歴史的な足跡を残す国になるでしょう。

(一九五三年一月、ニューデリーのインド国会での演説)

(二) 混乱に應える新しい政治力

人びとの意見を一致させるのはむずかしいことです。共通の心をもつのは骨のおれることらしく、みんなそれぞれの考えをもち、それを人に押しつけようとしています。混乱に應える新しい政治力をあみだすには、歴史を新しくつくるような強い決心をしなければなりません。

すべての人、すべての国をかちとるような強い建設的な計画が私たちにありません。指導者たちは、自分本位な態度で、問題の解決には何の役にもたない会議や方式に、うき身をやっていきます。口では国のためというが、たいていの場合、自分自身のためにやっているのです、いつも機を逸しています。

しかし、新しい政治力が世界に動きだしています。そのような建設的内容をもった会議は問題に対する解答を与えることが出来ます。昨年十月コロンボ市で初めて開かれたアジア太平洋諸国のM R A大会に出席した国連代表は、「私は何年もレークサクセスにいたが、この二週間

にはるかに多くの真の融合と平和が作り出されたのを見た」と言っています。私は最近七カ月間、アジア各地に滞在してきました。二十五ヶ国、二百人の人が私と一緒にM R Aのメッセージをセイロン、インド、カシミール、パキスタンに伝えました。またエジプト、イラン、トルコにも招かれました。これらの国々にはみなM R Aに対して同じ反応を示しているのです。

パキスタンに私を招いたのは、建国の功労者の一人ジンナー氏でした。彼はロンドン滞在中のある夜、つれづれのままにM R A劇「忘れられた要素」を見にきました。一日中多忙で疲れ、しかも目的を達しなかった彼は終始沈黙のまま、劇を見ていました。劇の中で、ある頑固な経営者を指して「あいつは一步もゆずらぬ人間だ」というのをきいて、ジンナーははじめて笑いました。このとき新しい何ものかが心の中にうごきました。その後、ロンドンのわたくしの家へ食事になねいたとき、彼は次のようにいいました。「是非パキスタンへ来て下さい。あなたはこの世界の憎しみに解答をもっておられる。正直に謝罪することは問題解決の鍵ですね。」

誰がこの鍵を歴史の鍵穴に入れて「明日への門」を世界中のすべての人に開放し平和を招来させるのでしょうか。

わたくしは生涯の中で、歴史的な二つの発見を経験しました。その一つは原子力の発見です。原子力は測り知れないエネルギーの根源でありその活用です。そして今や原子力時代となりま

した。他の一つは人間の発見で、人間もまた測り知れないエネルギーの根源であり、その活用です。この発見がイデオロギー時代を生みました。

これが現代を理解する鍵です。

政治家達が兵力を増し、会議を開き協定を結ぶ間にも破壊的な勢力は港湾労働者、公務員、科学者、兵士、教育者などの心をかちとっています。不平、悪感情およびよりよい世界を求める心が利用され、破壊的な勢力はすべてを投げうって世界をかちとるために行動を起こしています。そのため、政府が生産を上げようとするとき、産業の中には「サボタージュ」が行なわれます。政治家が会議を開こうとするとき重要な秘密がもれます。国と国との融合の必要が叫ばれているのに分裂のみがふえていきます。

何が答でしょうか。あたりまえの人間に理想と同志的な結合をあたえ、世界を再造する計画に参画させる政治力こそ解答です。

他にも道があると思いたいものです。すべての国のすべての人は、自分と国の利益をもととした解決案しかもっていないようですが、解答の秘訣は「自己流でなく、神の方法を求め、自己の意志ではなく、神の高い意志を求めることにあるのです」。

これが混乱を解決する道です。神を絶対の權威とすること、口先だけでハイというのでなく、

生活の規律をもつて神の權威を受け入れること。これは人間を本来の姿にかえし、真実なものにします。自分をよりよく見せようとする必要はありません。ありのままのあなたに人びとは喜んで集まってくるでしょう。

混乱は妥協から生まれます。明晰さは改変チェンジから生まれます。道義的改変チェンジはかくれている不純な動機を照し出し、眠っている内部の力をゆり動かします。他の人が見る目で自分の国を見たら変わりたくなることは確かです。

絶対の道義標準は真の政治力のわきあがる泉です。口に平和と融合を唱えながら、人に対して悪感情を宿す人は国々にの憎しみに答えることはできません。私たちは他人の頑固さを批難しますが、私たちの子供がよく知っているように、自分自身の頑固さを無視しやすいです。私たちは神の導きを口にしますが、心の清きもののみが神を見ることを忘れやすいのです。話す人ではなく聴く人が導きを受けます。新しい政治力の鍵は新しい型の政治家のなかにあります。

今日はわたくしの七十五回目の誕生日です。わたくしは沢山の国で多くの体験を重ねてきました。しかし、それらのすべては四つの絶対道義標準の根本的真理と神の意志に絶対服従することに帰着します。この体験のないかぎり、何にもないといってよいのです。それがあれば、

すべてをもっているということができません。新しい人がその生命で綴る新しい世界、これが唯一の希望です。決定的な証拠があるのです。

(一九五三年六月、アジア中近東の旅を終えてロンドンにて)

(三) 精神界の電子学

わたくしはロスアンゼルスで新しいものを発見しました。

晩餐会に呼ばれたときに、ある人を通じてそれを発見したのです。この人は現在、原子時代の次の時代へわたくし達を導いている電子という新しい科学の開拓者です。

今日、電子学は新しい科学です。精神のことは、すでに古くから知られていますが、それは古い科学です。しかし、これを電子学と結びつけると、世界に生命と思想の新しい次元をもたらすことができます。何百万のひとびとが速やかに、しかも自動的にこの新しい精神の電子学を実行できるのです。

いったい精神の電子学とはどういうことなのでしょう。わたくし達にはほとんど分っていないのです。かすかに、それをかいま見る程度です。アメリカ大陸の端から端へ、五十分の一秒よりも少ない時間に、人の考えを送ることができるといふような瞬間的な、しかも実在する反

応を考へてごらんさい。この電子学によれば、瞬間的に人の話す声が聞えるばかりでなく、その人の話している時間も、何ら人間の力を要しないで記録され、しかも、月末には「つけ」が送られるというのです。わたくしにはこれを説明できません。

さて精神界の電子学について考えましょう。それは「神の心」による働きです。地球を瞬間的に廻りうるものです。また、今までかつて探險されたこともなく、知られてもいない、資源にふれるものです。「ガイダンス」ということを考えてみましょう。それは神の心と私の心との問題です。昼であろうと夜であろうと、どんな時でも頭に浮ぶ考えは人の心の創造主のものであり得るのです。こういったことには、誰も測り知ることが出来ないものがあります。

ある考えが頭に浮ぶことがあります。ほんのちょっとした考えかも知れませんが、それを心にとめ、実行にうつすときに何百万のひとびとが恩恵をこうむることがあるのです。国を誤つた方向から救ふことのできる政府の人たちと接触のある友人に関することかも知れないのです。

精神界の電子学はすべてのところの、すべての人の手に入るものであり、それは必要であるばかりか、ごく自然のことになり得るのです。アメリカで一番尊敬されている黒人の新聞アフロ・アメリカン紙は、アジア・アフリカ会議にM R Aの根本的解答がしめされた喜びを大たん

に「バンドン会議でM R Aを提唱」という見出しで示しています。本文は次のとおりです。「イラク首席代表ジャマリ博士は、会議の初頭に『M R A（道義的再武装）は今日の世界の必要である』とのべ、かつさいを得、さらに『われわれが道義的再武装を基礎とするとき東西両陣營の区別なく世界が一つになることができる』とのべました。」

M R Aの真理は回教徒の人たちによって素直にうけ入れられ、世界のすみずみまで広がり、すみやかにすべての文明を融和する絆きずなとなるでしょう。

わたくしの祖先のピブリアンダーという学者は、四百十三年前に初めてコーランをドイツ語に訳し、ヨーロッパに紹介した人でした。今日アラブ連盟の書記長はこういっています。「アラブの世界はM R Aの進展を現在世界の最も有意義なできごととして迎えている。」

エジプトの総理大臣は、本年の初頭ワシントンで開かれたM R A世界大会へ送ったメッセージにこういっています。「あなたがいま世界にとりもどそうとしている心を変える秘訣なくしては、政治家を悩ます多くの問題は解決できない。それは人間の利己心が生み出す憎しみや嫉妬から、すべての人びとを自由にし、神の意志に従うときに生まれる創造的なインスピレーションを与えるものです。」

現在の段階は、人間が問題を解決するか、問題によって破壊されるかの瀬戸際に来ています。

すべての国の政治家は憎しみ、貪欲、怖れという人間の感情によって造り出された問題は、いかに有能で誠実であつても人間の知恵だけでは解決できないことがわかり出ています。それを解決するには電子学的發明、精神面の体験が必要です。新しい時代を導く新しい次元が必要です。この体験はすべての土地のすべての生活分野に入つていかなければなりません。

この新しい次元を如何にしてとらえることができるでしょう。聖フランシスによるとその秘訣は内なる声に耳をかすことです。彼にいわせると毎日少くとも最少限度に三十分は絶対に必要な時間だといっています。特に忙しいときはまる一時間が必要だといっています。

イタリーの僧侶のいうには神の心から人の心に伝わる考えを書きとめることがよいそうです。彼は「書かなければ忘れてしまう。そうすれば結局考えないことと同じことになる」といっています。また「わたくし達の自我をとらえて、それを打ちくだいたとき、はじめて神の存在を知りうるのだ」ともいっています。

精神面の電子学は、こんなにも簡単で自然で、しかも根本的です。これが新時代の鍵です。精神界の電子学の経験もなく、神の導きも、変わることも知らない政治家は、嵐の中をラジオも地図もコンパスも持たずに未知の土地を飛行しようとするのと同じです。必要なばかりでなく罪悪です。それは無軌道なほど利己的です。必然的に破局へ導きます。

精神面の電子学を身につければルネッサンスは必然です。しかも早く起ります。政治家も、実業家も、労働組合指導者も、労働者も、主婦も、家族の一人ひとりみんなが役割りをもつています。神に導かれるとき、総ての人は融和を作り、現在のいらだたしさと分裂に答をもたらすことができます。二十世紀の後半の解答は精神界の電子学が与えるでしょう。

これは効果のある解答です。

(一九五六年五月、マキノ島)

(四) 間違つたやり方と正しいやり方

「われわれには現在の世界で生活していく準備ができていない。こう言つた人は、スプートニクに答え、アトラスを打ち上げるために、四百人の科学者と三万五千人の人を指揮していた男です。宇宙にロケットを打ち上げるにも間違つたやり方と正しいやり方があります。地球上に生きるにも間違つた生き方と、正しい生き方があります。

あまりながい間、間違つた生き方をしていたため、それがあたり前だと思ひ込んでしまうのです。家庭は破壊され、産業界は混乱し、国内は分裂し、会議は行きづまる。こんな事が当り前だと受けとめられています。本当はやり方が間違つているための結果なのです。多くの人が共産主義を悪く言います。しかし、私たちの社会に混乱と分裂をおこしている憎しみ、貪欲、怖れ、利己心などが、共産主義の本質であり、力ではないでしょうか。共産党に加盟しない何百万の人びとは、自分達の生き方によって、むしろ共産主義の進展を助けています。

正しいやり方は必ずしも「私のやり方」ではないのです。また「あなたのやり方」でもないかもしれません。正しいやり方は神のやり方なのです。人によっては、自由とか民主主義は好き勝手なやり方だと思つていきます。ひとりひとりが勝手に決めて、勝手に道を行く。両親は両親で勝手な生き方をし、子供がその二の舞を踏むと驚いています。今年中にアメリカでは百万人以上の未成年が少年院のお世話になるといわれています。破壊された家庭は国中に幻滅をまきちらしています。

政治のやり方にもまちがったやり方と正しいやり方があります。ドイツ外務省の高級官僚であり、また前のカナダ駐在の大使をしていた人が、新聞を通してこう語つています。「戦後のヨーロッパの政界で最も驚くべき出来事は、ドイツとフランスの和解です。かつて、敵同士であつたこの二カ国が、永久的な友情を見出した主たる原因は、M R A です」と。ドイツのアデナウアー総理は、私への手紙でこう言つています。「M R A の仕事が大げさななければ、世界の平和は保てないでしょう。また彼は「M R A は国際的理解を深めるために、目にはみえないが、効果的な力である」といつています。

過去十五年間に、いろいろな国際会議に出席していたある外交官は、次のように書いています。「ここ数年カ月の間に、外交官を驚かすような出来事が三ツあります。そのいずれもチェン

ジを体験している人を通して答が得られたのです。

第一はレバノンの危機です。世界を分裂させるようなこの事件は、アラブ十ヶ国が融合した事によって解決されました。その中心人物はアラブ連盟の事務総長で、事件勃発の時にエジプトにおりました。ただちにニューヨークへ飛ぶべきだ、と心にはっきり感じたのです。神から与えられた考えだと信じて、この人はその考えに従いました。ニューヨークに行ってみると、アラブの諸国はお互いに意見がまちまちで、他の国々にも同様に分裂していました。戦争さえ起こりまじき状態でした。朝早く、彼の心に次の考えがひらめきました。「アラブ諸国は戦場となるべきでなく、かけ橋となるべきだ」彼はアラブの代表を一室に集め、お互いに納得のいく決定ができるまで話し合いました。こうして得られた結論が国連で決をとった結果は、賛成八十、反対ゼロでした。ロンドン・タイムズは次のように報道しました。「一夜あければ、魔法のようは変化がおきていた」。

第二の出来事は、アジアにもたらされた新しい融合です。その一つのあらわれは、日本の国会でフィリピンの大統領が歓迎された事です。一年あまり前までは、両国間の感情は相当きびしく、とてもこんな事はできませんでした。フィリピンの大統領を国会に迎えた議長は、平和条約の署名者のひとりでしたが、この二年間にM R Aを通して、日本をフィリ

ン、インドネシア、ヴェトナム、自由中国との間に和解をもたらし、さらに韓国と日本の状態も改善されつつあると述べています。フィリピンの大統領は「過去の憎しみは、許しと思いやりの心でいやされた」と述べています。ニューヨーク・ワールド・テレグラム紙は、次のように報道しています。「フィリピン大統領の訪日は戦後処理に歴史的な転換となるだろう」。

第三は最近のキプロスの問題処理です。あるアジアの国の駐在大使が私の家にきました。この人は国連でキプロス問題を解決するための委員会の長として努力をしていました。「キプロス問題が解決しなければヨーロッパの融合はメチャクチャになったでしょうし、今年中にヨーロッパに戦争がおこったかもしれない」と述べていました。答をもらしたのは、イギリス、ギリシャ、そしてトルコ人だったのですが、その人達はMRAを通して、自分達のやり方が間違っていた事を正直に認めたのでした。イギリスの国会議員のひとりがキプロスの指導者達を訪問して、自分と自分の国のあやまちを正直にあやまりました。あるギリシャの指導者は、キプロス島でおこった流血の惨事について、ロンドンでイギリスの指導者達にあやまりました。トルコのある新聞の論説員は、アテネに行つて、ギリシャの新聞に自分の国トルコとギリシャは敵同士としてではなく、兄弟として生きるべきだという記事をかきました。

この一連の出来事をニューヨーク・タイムズは次のように評価しています。「啓発された政

治力のあらわれである」と。つかれすぎてインスピレーションのない政治家たちに、これは答となるでしょうか。

ある外交官がこんな事をいっています。「今日、アフリカでは、どこへ行っても、白人に対して『いつ君たちは帰るのか』と聞いていますが、M R Aの人には『いつまた来てくれますか』というのです。』

ナイジェリアの都会、イバダンは西部アフリカで一番大きい大学の所在地ですが、その新聞は「M R Aこそはただひとつの希望」という見出しを書いています。

南アフリカの各都市で映画「フリーダム」は満員の劇場で連続放映されています。ケープ・タウンでは劇場の支配人みずからが映画を紹介しました。「正しい考え方を世界に広げるために、この映画は自由諸国にとって最も効果的な武器だと信じています」と。映画が終わると総理大臣に紛っていた人で、前には南アフリカのアフリカ人教師会の会長であった人が、舞台に出て、会衆にむかって話しかけました。こんな事は今までなかった事です。観衆の中の白人が舞台の上から黒人の話を聞くのははじめてでしょう。毎晩、観衆の多くの人が個人の生活を含めて、南アフリカの正しいあり方をどうしたら得られるかと彼に聞くのです。

世界中で人の心をかちとるための戦いが戦われています。西欧が創り出す映画をみて、間違

った生き方を身につける子供たちのために涙を流すアジア、ヨーロッパ、アフリカそしてアメリカの母親たちもいるのです。デイズニーのカメラマンで、リチャード・テグストロムは「フリーダム」を撮影するために、わざわざアフリカへ行ってくれました。アフリカで目にした数かずの退廃的な西側の映画をみて彼は嘆いていました。「真黒なアフリカの夜空の白いスクリーンに写し出される映画は無防備のアフリカの青年達の心を毒しています。彼はいま、自分の才能を投じて、それに対する答を映画化しています。奴隷を両親に持ちながら、教育に身を投じたメアリー・マクラウド・ベヒューンの物語「最高の経験」を作成しています。ベヒューン女史はやがて大統領顧問となったのですが、MRAについて次のように語っています。「私たちの時代のこの偉大な融合の勢力に一部になれた事は、私の生涯の最高の経験でした」と。

この映画は昨年四ヶ月間、アメリカの南部で上映され、ワシントンのナショナル劇場では百二十三年ぶりの大観衆でいっぱいになりました。アトランタの新聞記者のひとりが出ています。「これこそ今年の南部の最大のニュースだ」と。テグストロムはさらにこう言っています。「映画を作成する人たちは今日の世界の必要を知ると同時に、人類の求めているものを知る必要がある。政治家がこれを知れば、世界を破局から救う事ができるだろう」と。

そうです。全身全霊を傾けて国々にの指導者に、怖れと憎しみ、そして貪欲から自由になる

為に働くこと、そのやり方を知ると同時に、お互いが融合する力は、新しい世界をつくるとい
う目的のために、自分の意志を神にささげる時に与えられるであらう。』

政治家にも間違つたやり方と正しいやり方があります。MRAは国内においても、国際間
においても、行きづまりが生じた時、怖れと憎しみと貪欲に答をもつた時に、問題は即刻に解決
される事を証明しています。私たちの目の前にパノラマのように転回するこのすばらしい答え
は、あまりにも簡単で見落す人がいるかもしれませぬ。しかし、これなくしては何事もできな
いほど、これは根本的なものです。

(一九五九年、マキノ島にて)

(五) 勇気ある選択

四十年前のちょうど六月に一人の男がオックスフォードにやってきました。この男は人生の機微についてもかなりの知識をもっており、東洋と西洋の事情にも通じていました。

今ではケララ州という名でよばれているインドの南部にきたとき、この男は英国人のある司教に会いました。その人がこの男に「ぜひオックスフォードに行きなさい。オックスフォードは、あなたの経験を必要としているから」とすすめたのです。

それから四十年、オックスフォードにもたらせられたこの男の思想は、その挑戦を受け入れた人もまたこれを拒否した人も含めて多くの人びとや国々に影響を与え今日に至っています。オックスフォード出身の国会議員で二十五年議席をもった人で、二、三年前にはキプロス島問題の解決に大きな役割を果たした人がいます。この人は今週公けの席でMRAについて極めて勇敢な発言をしました。その一週間前にはまた同じオックスフォードのあるカレッジの学長が

アフリカの映画「フリーダム」を上映するに当ってオックスフォードの観衆に向つて勇敢に自分の信念を述べました。英国の歴史を見ると多くの眞の愛国者たちが決意と信念をもつて間違つた風潮と戦い、国民生活に正しい方向と基盤を与えてきた多くの例があります。この人びとはその伝統を受けついでいるのです。このメッセージの表題「勇氣ある選択」はあるオックスフォード出身者によつて書かれた本の表題からとつたものです。この本には、勇氣をもつた人びとが自分の信念を通して歴史の流れを変えてきた事実について書かれています。

オックスフォードでのそのような人の一人はストリーター教授でした。新しい考えがこの偉大な学者をゆりうごかしました。彼は挑戦され、そして感動しました。オックスフォード市の公会堂で多くの大学教職員を前にして教授はこう語りました。「私は長い間、この運動を外交官たちのよくいう『好意ある中立』という立場から見守つてきた。しかし今夜、私は決意をしめた。ここ数年来、私は世界の事情が次第に悪化し、絶望的になつていくのを感じてきた。いわゆる善意をもつた人は多い。しかし善意だけではわれわれの前に横たわっている巨大な困難、戦争、階級闘争、そして経済的破綻などを解決するには不十分なのだ。」彼はまたこういいました。「近代文明を救うには道義的目ざめが必要だ。英国の指導的立場にある人たちが神の啓示と導き

をうることを学ぶとき、英国でもそれは可能になる。そうした英国は世界を救うことができる。」
「私は決意した」その言葉に鍵があるのです。

もう一人のオックスフォード出身者、故ソールスベリー候爵がいます。彼は英国上院でこのように述べました。「現下の世界状況の根本問題は経済ではない。道義的問題である。彼はストリーター博士の確信を裏付けて更にこのようにいいました。「現在この国をはじめ世界各國に非常な勢いでひろがりつつある偉大な運動（M R A）の言葉を借りるならば、新しい世界をつくるために必要なものは神に導かれた人たちである。その人たちによって神に導かれた国ができ、そして新しい世界ができるのである。経済的解決法は問題の根本にふれるにはあまりにも小さすぎるのである。」

英国の労働運動の発祥の地となった東ロンドンでM R Aが発足したのですが、ここにまた勇氣をもって道を選ぶ人がおりました。トッド・スローンは有名な英国社会主義の創始者ケア・ハーデイの同志として戦った港湾労働者です。彼はこう書いています。「われわれがM R Aを生き、生活に実行すれば、世の中の混乱はなくなるだろう。M R Aとは神の指導力を喜んで従順に受け入れることだ。人間が変わるといふこの革命こそ私にとって真の意義をもった革命だ。そしてこれは本当におこりうるのだ。」

世界港湾労働組合の開拓者、ベン・テイレットは死の床からこのような言葉をおくってきた。

「フランク・ブックマンにいてほしい。戦いをつづけてほしい。貴方のやうなことは大きな国際的な運動になつてゐる。これを最高度につかうべきだ。これは明日への希望だ、これこそがきつと世界に健全さをもう一度与えてくれるだろう。」

南アフリカの総督をしていたアスローン伯爵は一九二九年にM R Aにあつてゐます。第二次大戦の初期に英連邦に対するラジオ放送の中でこのようにいつてゐます。

「M R Aの呼びかけは世界を席卷してゐる。そして何百万の大衆に新しい希望を与へてゐる。各国の元首や最高責任者、政界、財界の指導者は階級、宗教、党派を問はずこの精神を歓迎してゐる。文明をむしろ人間性の深い病氣に對するこれが答なのだ。」

「M R Aは心の改変オキシを主張する。あらゆる人間關係に新しい息吹きを与えるものだ。M R Aは個人生活はもとより家庭に對しても國家に對しても神の意志を指導原理とすることを求めてゐる。」

世界の各地で思想の戦いがげしさを増してくるにつれ、ますます多くの人びとがこれら開拓者の心の炎を受けつぐやうになつてきました。正しいことのために真底から燃えあがつて戦

う人のみが間違つたことのために情熱を燃やす人びとをかちとる希望をもっています。

「天から与えられた火」これはイタリーの愛国者であり、宗教家であつたドン・ストルツォがマキノ島の世界大会に寄せたメッセージの中でM R Aを評した言葉です。ストルツォ氏の確信の中からイタリー、フランス、そしてドイツのキリスト教民主党が生まれました。

そしてこの党が戦後のヨーロッパに偉大な三人の政治家を出したのです。即ち、デ・ガスペリ首相、シューマン首相、アデナウアー首相です。

デ・ガスペリ首相は、「M R Aは世界の悪の根源をつくことによつて、すべての人が望んでいような人と人、国と国の融合をつくつていくであろう」と確信を述べています。

シューマン首相はこう書いています。「M R Aに実際に行動にうつされた人生哲学である。政策の変更が問題なのでない。人間の改変が問題なのだ。民主主義と自由はそれを求める人びとの生活の質の高さによつてのみ救うことができる。」

アデナウアー首相はM R Aの力を知っています。彼は「M R Aは数多くの極めて重要な国際問題の中で人びとの考えを変え、融合をもたらすために目には見えないが極めて有効な仕事をしている」と書いています。

これは今年八十三歳の誕生日を迎え、その長い生涯の間、世界の各地を歴訪し、多くの人に会った男、即ち私（フランク・ブックマン）が、今日皆様に語っているのです。

私はインドの総督や知事と交友関係をもち、また彼らに反対して戦った人びとも知っており、両者の融合を助けたこともありました。また一九二九年以来アフリカの政治家たちを知り、ヨーロッパ、アメリカの政治家たちと五十年にわたる交友をもっていました。私は二つの唯物的イデオロギーが発展していくのを見ましたし、二つの戦争が世界を破壊し自由が後退していくのを目撃し、さらに力強い答が生まれ進展していくのをも経験したのです。

われわれは、世界の革命に直面しております。われわれの前には三つの可能性しかありません。一つは戦いをあきらめることです。既にそのつもりになっている人も大分あるようです。もう一つは武力をもって戦うことです。それは人類全体の自殺の危険をはらんでいます。そして最後の道はわれわれが共産主義世界にも非共産主義世界にも次の段階を示すよりすぐれたイデオロギーを発見することです。根本的な相違がないかのように、あるいはまたあっても大した問題でないかのようによそおってその場をつくろうだけではどうにもなりません。また思想的な挑戦に対して経済的、政治的、軍事的な方法だけで対抗できると考えてもそうはいきません。絶対道義標準というものは現在では単なる個人的な問題ではありません。それは国の存続

の条件なのです。われわれは国家生活、政治生活、経済生活、学生生活、あるいは家庭生活の中から人間を変えることによって、すべての悪を一掃しなければなりません。もともと神に属すべき地位にたつて人が他人を支配するのを許したとき、奴隷制度がはじまります。

「人は神に導かれることを選ばなければならない。さもなければ独裁者の支配を受けることになろう。」

善と悪との戦いには中立はありません。安価な代償では国は救われません。それぞれの国の優秀な人たちの決意によって人類は救われるでしょう。私たちが神と共に全面的に戦うならば必ず勝利するでしょう。

勇氣ある人びとは

いま正しい道を選び

臆病な人びとは

選択を避ける

しかしいまに多くの人びとが

一度拒否したものを

初めからもってでもいたかのように

よそおう日^がくる。

(一九六一年六月、コ^ーにおいて、これが同年八月に亡くなった博士の最後の演説となつた)

フランク・ブックマンについて

ピーター・ハワード著
世界の再建より

フランク・ブックマンはスイス系のアメリカ人である。彼の祖先の一人はチェーリッピのツィングリー（ルーテルと同時代にスイスで宗教改革のために努力した指導者）の後継者で、コーラン経典をドイツ語に翻訳している。一七四〇年に一家はアメリカのペンシルバニア州に移住したが、アメリカ移住後、祖先の一人はバレー・フォージの激戦のとき、ワシントンの部下として戦い、また一人は南北戦争のとき開戦当初リンカーンの軍隊に志願した。

一九二一年、彼はイギリスのある軍事顧問に招待されて、ワシントンの軍縮会議を傍聴に行った。このことは二つの点からいって意義深い。第一はワシントンへ行く列車のなかで、彼の心のなかにひとつの考えが迫ってきた。それは『辞職、辞職、辞職』であった。経済的に安定した安易な生活をすてて未知の道を選べという挑戦であった。第二は会議の模様をつぶさに見ていた彼は、人間性を変えない限り世界平和の計画だけでは足りないという日頃の確信を強

めたのである。

彼は、個人の改変チェンジを土台として経済、社会、国家及び国際間の根本的変革を計るため、あらゆる階層の人たちを訓練しはじめた。オックスフォード大学（註ブックマンはイギリスのオックスフォード大学に行き、当時第一次世界大戦の戦線から再び学窓に戻ってきていた青年学徒たちと共に世界を再造するための新しい闘いをはじめた）で彼に会った南アフリカから来たたローズ奨学金の学生たちがブックマンと一緒に帰国したとき、あまりにもその影響が強かったため、ブックマンの業績は南アフリカ全体に知れわたった。そのとき、南アフリカの新聞が『オックスフォード・グループ』という名前をつけたのである。

運動は急速に発展し、一九三〇年代には世界的に発展した。ノールウェイの国際連盟代表としてヂエネヴァにおいて、のちにその議長となった人がこういった。「われわれが政治の在り方を変革しようとして成功しないのに、諸君は人間を変えることに成功し、多数の人びとに新しい生き方を教えておられる」

一九三八年にブックマンは、軍事的抗争では世界のイデオロギー問題を解決することはできないという現実を直視して、道義の再武装（MRA）を唱え、戦いに勝つためにも、また正義にもとづいた平和を築くためにも道義力が必要であることを明らかにした。

フランク・ブックマンの洞察力と行動は、各国にイデオロギー的闘争への心構えを与えはじめた。これはファシストとコミニストが一番恐れていたことだった。すなわち、デモクラシーの産業力と武力にさらに真のデモクラシーのイデオロギーの偉大な力が加わることであった。

運動の初めから、道義的イデオロギーが世界に根強くなるのを喜ばない人びとから彼はひどく攻撃された。コミニストは公式通り彼にファシストの烙印をおした。ナチスは彼の仕事を「これはデモクラシーの目標にクリスチャン的な衣をきせたものだ。（その会員はキリストの十字架に忠誠を誓うことが要求され、キリストの十字架を亡ぼそうとするスワチカ（ナチスの十字）を排撃するものである。これは明らかに国家社会主義ナチズムに反するものである。」

今日になって、ブックマンのイデオロギー的洞察力の正しさは次つぎに証明されてきたが、彼はコミニズムの危険を力説する一方、反共は解決できないことをも強調してきている。「真の解決は道義と精神を基としたイデオロギーによらなければならない」と彼はいう。「このイデオロギーにはわれわれの文明に含まれている道義的弱点をあらため、現状維持を打破しようとしている世界大衆の支持を受けるだけの創造力がなければならない。」

世界の政治家が陰に陽に彼の助けを求め、また世界的に拡がった大運動の指導者であるがブックマンは一瞬もユーモアを失ったことはない。また彼の人に対する思いやりと、その人たち

の必要に敏感であることは独自のもので、年とともに深まっている。

彼は世界再造を使命として一生をささげているが、現代にあまり見られない偉大な素質を持つていることが分る。それは人が責任を十分に果たすように訓練し、人をのばすことである。

彼はよくいう。『十人の人が自分より上手に自分の仕事をやれるように訓練するまでは、成功したとはいえない』。

彼が一生をかけた事業は、革命的チームワークによって将来続けられていくだろう。

人に対する彼の愛、彼らの必要や失敗についての敏感さ、人に自分の最善を生きようとする意志を与える力、これは賜ものであり、それが彼の仕事がここまでのびて来た秘訣であり、彼にいわせると誰もが身につけることのできるわざである。スコットランドの炭坑夫ピーター・オコナーはフランク・ブクマンとの会見の印象を次のように語っている。『あなたに会った半時間に、今まで誰に会ったときよりも大きな助けを得ました』それに対してブクマンはこういった。『私のしわざじゃない。神のなせるわざです』。

三十年前にこの仕事をはじめて以来、ブクマンは自分の家をもったことがない。十分な訓練を受けた彼の協力者の数は何百人に達している。彼らは月給なしで働いているが、決して飢えたことはない。

フランク・ブクマンはこうもいう。「神が導くとき、神はそなえる。」

この解答が根本的必要であると確信している多くの人が、この革命的勢力を進展させるために犠牲を払っている。多額な寄附はめつたにないが、生活費をきりつめての少額な寄附が多い。最初からブクマンの仕事は、これが正しいと信ずる人びとの犠牲によつて推進された。人は最も深い信仰のためには、最善なものを出すものである、人びとは給料を、資本を、家を、貯金を出している。

イギリスでは港湾労働者や炭坑労働者、シヨップ・スチュアードたちが各地で闘争資金を積み立てている。

ヨーロッパのある前共産党員に、ある人がMRAは実業家の寄附を受けているかとたずねたとき、彼は次のように答えた。「寄附する人もある。もつとたくさんの実業家が寄附してくれたらよいと思う。実業家が社会正義と新しい世界秩序のために力強く闘うグループに金を出すのを、労働者は大いに喜ぶはずだ。」

フランク・ブクマンに会うまで二十五年も党員であつたドイツのルールの共産党の幹部からの手紙はその典型的なものだ。

「闘いはなかなか激しいのです。しかし素晴らしいことだし、特に家族が一緒にこの闘いができ

ることは感謝です。善が勝たなければなりません。仕事のあい間にも私は人にこのイデオロギ―を伝えるため、話をしています。そしてできるだけよい手本になろうとしています。私はたくさんの人間的な間違いをしたり、また弱点もあります。家族も同様です。神が援けてくださらなければならぬことが度たびです。しかし一つだけ確かなことは、今ほど幸福と満足を感じたことはかつてありません。これはあなたのおかげです。

これで残念ながらペンをおかねばなりません。私の家族全体から――妻と娘と娘婿及び私からの心をこめた挨拶をお送りし、併せて、あなたの御健康を心から祈ります。

それにもまして、全世界各地でこの素晴らしいイデオロギ―が勝利を得て、人類が再び幸福を得るようにと祈ります。」

フランク・ブックマンについて

ピーター・ハワード著
フランク・ブックマンの秘訣より

フランク・ブックマンの生涯には一つの秘訣があつた。

その秘訣のために彼は愛されもしたが、憎まれもした。博士は会う人のだれでもが、富んでいようが貧しかろうが、黒人だろうが白人だろうが、社長であろうが労働者であろうが、だれでもが全く新しい生活の基盤を発見することができると信じていた。そのことが階級や社会制度の壁を越えて、彼を国の生命の中心に触れさせることとなつた。

彼が常に世界的な基盤でものを考え、かつ生きたのはそのためであつた。死に臨んで彼は次の挑戦をのこした。

「世界は神に導かれた人びとによつて導かれねばならない。全世界を神の支配にゆだねようではないか。」

今から四十五年前、一九一六年に彼は人びとに向かつてこう言った。「諸君は大陸という基盤で生きなければいけない。そして大陸という規模でものを考えなければいけない」当時その考えを理解した人はごく少なかった。

革命家としてのブックマン博士を理解しなければ、彼の神髄はわからないだろう。彼はまさしく革命家なのである。博士の世の中や人びとに対する考え方は、普通の人と違っていた。

彼は人びとを黒人とか白人とか黄色人種とかいう皮膚の色によつて区別することなく、すべての人が同じ弱点をもち、同じ答を必要としている神の子であると考へていた。「問題は肌の色でなく人格である」と彼は言った。博士は一九一五年以来何回もアジアを訪問しているが、その最初のときに「カラスは世界じゅうどこに行つても黒い」と言つて、人間性がどこでも同じだということ語っている。

富のあるなしで人の価値が左右されるとは思わなかつた。博士は貧しい人に同情し、物質的にもできる限り助けようとはしたが、それだからといつてその人が人間として直面しなければならぬ不正直とか不純潔を見のがしはしなかつた。ある時、M R Aは階級的な運動だと人がなじつたとき、博士は即座に「そのとおりです。確かに世界には二つの階級があります。チェンジする人とチェンジをこぼむ人と」と答えた。

博士はまた言った。「世界にはすべての人の必要を満たすだけのものはあるが、貪欲を満たすものはない。すべての人が互いに思いやりを持ち、分かち合えばすべての人の必要が満たされるのではないか。」

ベテランの外交官で戦後、ソ連その他の国々にとの交渉に直接当たったある人がブックマン博士について次のように語っている。「博士は三つのことをした。第一は博士はわれわれよりずっと早くから問題の根本がどこにあるかを見抜いていた。第二に博士は人の生き方を変えることにより問題に解答を見出した。第三には一番困難なことであったが、あらゆる大陸に勢力を築きあげこれによって、この解答を世界にもたらしたのである」

聖書の中で困るのはわからない点よりも、むしろわかりすぎている点だと、マーク・トウェインは言った。多くの人にとってブックマン博士の仕事についてもこれと同じことがいえる。博士は現代の世界の動向を変えようとして立ち上がった。一九六一年の夏、オックスフォードのある学長が、「近ごろの人は道義標準などを、もはや問題にしていない。それどころか、善悪の区別すら存在しないと信じている」と言った。

こうした傾向の中にあつて、ブックマン博士は半世紀にわたつて、おそれなく前進をつづけた。古くから伝わった真理を新しい方法で説き、頹廢した世代に神の道を受け入れることをう

ながし、個人はもとより国々にも徹底的に清掃する決意をせまつた。博士は政治家や、普通の人が高い生活規範に従つて今までの考えや、生き方を根底から革命化するように戦つた。道義がくずれ、放縦の名のもとに世界の基盤がぐらついているこの世代に、永久の真理と価値を土台にした堅実な基礎を与えようとした。

もちろん、博士は迫害を受けた。このような仕事に挺身した人は、歴史上いつでも迫害を受けている。キリスト教徒と称しながら、離婚、性的紊乱、飲酒、賭博、金銭、共産主義などの点で妥協している人たちは、昔キリストを十字架にかけたのは当時のいわゆる有識者たちであつたことを忘れてゐる。キリストが十字架にかけられたのは、彼が間違つてゐたからでなく、彼が正しかつたからである。何人のキリスト教徒が今日、自分たちの住んでゐる社会に、強い道義的な線を引くような生き方をしてゐるだろうか。

ブックマン博士はキリストを単なる善意だけの存在だとし、人や大陸の陥つてゐる病弊に対して無力であるとする考えには決して同調しなかつた。そういうふうに見える無力なキリスト教徒こそ、自分の信仰を自ら否定するものであると博士は強く感じていた。

博士を愛し、その仕事に忠実な友人は多かつた。しかし、中には彼を憎み、さげすみ、偽つて伝え、あざける人もいた。しかもそれは博士が正しかつたためである。博士に敵意をもつ人

たちは彼の死後も攻撃と侮辱をつづけている。しかし、博士の平安は決してきまたげられないであろう。

「迫害は予言者をきたえる焰だ。批判のつぶては一日を迎える気魄をつくってくれる」と博士は言った。そしてまた次のような確信をいだいていた。

「極端な悪には極端な善で対処しなければならぬ。狂言的な悪への追隨は情熱的な善への追求でこたえなければならぬ。情熱のみが、情熱をいやすことができる。相互いに争い合うイデオロギーによつて分裂した世界をいやすものは、全世界を包含する、よりすぐれたイデオロギーでなければならぬ。」

道義的勇氣がきわめて不足している今日、博士の生涯はまさに英雄的なものであつた。

非常時になし得るただ一つの正気なことは人を変えることである。

ブックマン博士は、人間性は変わり得るといふ経験にもとづいた信仰を生涯生きぬいた。それが解答の根本である。

人びとが変わるとき、国の経済機構が変わってくる。それが解答の成果である。

多くの人びとが変わるときに、世界の歴史も変わる。それが、われわれの世代の使命だと博士は言った。

人びとは平和を唱えながら、戦争の準備をしている。ブックマン博士は、平和とは単なる観念ではなく、人間が変わったとき生まれる現実であるといっていた。世界中の人が、神の支配のもとに生きるように、自分の生涯をささげて戦う人こそが、真の平和をつくることができるのである。

それが博士の生涯とその秘訣のすべてであった。

革命の道

頒価

五〇〇円

(送料別)

発行 昭和五十三年十月十五日 第一刷

発行者 国際 M R A 日本協会

発行所 東京都渋谷区代々木一―五七―二

ドルミ代々木 三〇八号

電話 〇三(三七四)七六〇〇番

印刷所 カツマタ印刷

Printed in Japan

人間性は変わることができる
それが解答の根本である
国家経済も変わることができる
それが解答の成果である
世界歴史も変えることができる
それがこの世代の使命である

フランク・ブックマン